632-47
1200501541756
632
.7

東

東鄉元帥記念寫眞帖

誄詞

至誠神ニ通シテ成敗ノ先幾ヲ制シ沈勇
事ニ臨ミテ安危ノ大局ヲ決ス身國難ニ
當リ功海戰ニ崇シ朕ノ東宮ニ在ル羽翼
是レ賴リ卿ノ三朝ニ仕フル股肱是レ効
ス德望域中ニ充チ聲華國外ニ溢ル洵ニ
是レ武臣ノ典型實ニ邦家ノ柱石タリ遽
ニ溘亡ヲ聞ク曷ソ軫悼ニ勝ヘム茲ニ侍
臣ヲ遣ハシ賻ヲ齎ラシ以テ弔セシム

632-47

寫眞目次

口繪　日本海々戰に於ける三笠艦上の東鄕元帥
勳章　(1)大勳位菊花章頸飾　(2)大勳位菊花大綬章　(3)同上副章
(4)功一級金鵄勳章

三笠艦上の聖上陛下と東鄕元帥

偉なる哉東鄕元帥、其名は歷史のあらん限り稱へらる。八十八歲の生涯は、忠誠謹直を以て終始一貫し、護國の柱石たると共に武人の典型であつた。三朝に仕へて武勳赫々、殊に今上陛下の東宮にまします頃、御學問所總裁としてよく其重責を果し。晩年の高潔なる生活は萬人崇敬して措く能はざるものがある。其日露戰役の偉勳の如きは世界的に赫き、不出世の偉材として永へに其聲華を內外に傳はらしむ。實に一世の師表にして蓋世の英傑である。昭和九年五月三十日溘然として薨ず。葬るに國葬の禮を賜はり、國を擧げて深く哀悼の意を表して、其敬慕の念を竭した。元帥の一生は、眞に躬を以て一世を導いたと謂ふべきである。其精神は萬代の末迄光被する處があらう。

632-47

寫眞目次

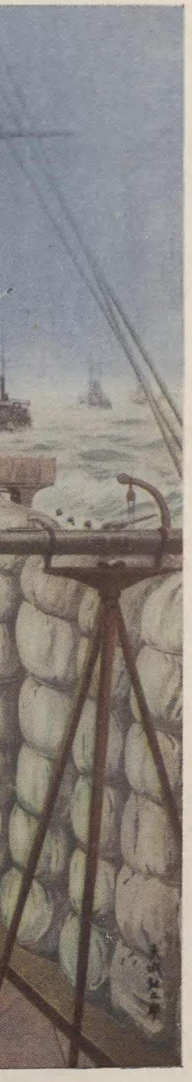
日本海々戰に於ける三笠艦上の東郷元帥
口繪
勳章 (1)大勳位菊花章頸飾 (2)大勳位菊花大綬章 (3)同上副章 (4)功一級金鵄勳章
三笠艦上の聖上陛下と東郷元帥
東鄕元帥肖像
鹿兒島東鄕元帥誕生地
神戸の東鄕井戸
薩艦 春日 艦時代 (後列右端が元帥)
二十三歳の撮影 (前列右が元帥)
明治四年英國留學辭令
ウースター乘組時代試驗答案
軍艦比叡
英國留學時代肖像
浪速艦長時代 (明治二十七年)
浪速艦
東鄕元帥のいろ〳〵
(1)來客に接す (2)明治十二年肖像 (3)通常服 (4)病を得る前
(7)海軍大尉時代自署 (8)大禮服 (5)皇國興廢 (6)旅順記念撮影
聯合艦隊司令長官時代
英國畫家の旅順口外の我艦隊圖
旅順口海戰圖 (明治三十七年二月八日の夜)
日露戰役三笠艦上の聯合艦隊司令部首腦
柳樹房第三軍司令部に於ける東鄕、乃木兩將軍 (明治三十七年十二月二十日)
旅順港内捕獲露船 (明治三十八年四月八日)
旅順口を閉塞したる (千代丸、福井丸、彌彦丸、米山丸、報國丸)
三笠艦
三笠艦内將官室
三笠艦檣Z信號
日本海々戰の歷史的快報 (明治三十八年五月二十七日)
黃海々戰に於ける破損した三笠大檣
日露戰役當時著用の外套
東鄕司令長官の身邊を冐せる敵彈の命中彈孔

の意を表して、其敬慕の念を竭した。元帥の一生は、眞に躬を以て一世を導いたと謂ふべきである。其精神は萬代の末迄光被する處があらう。

日本海々戰圖（東城鉦太郎筆）
三笠奮戰圖（中村不折筆）
敵將ロゼストウエンスキーを佐世保病院に訪ふ圖
伊勢大廟參拜圖（明治三十八年十月十九日）
東宮御學問所總裁拜命述懷
東鄕司令長官帝都凱旋（明治三十八年十月二十二日）
聯合艦隊凱旋記念撮影（明治三十八年十月二十二日）
旅順白玉山表忠塔
對馬日本海々戰記念碑
鎭海灣記念塔
伊勢大廟前記念碑
大正天皇御渡韓供奉（明治四十二年十月十八日）
西鄕南洲五十年祭（昭和二年九月二十四日）
南洲墓前（明治三十九年）
鴨獵（明治三十八年二月六日）
英國少年と東鄕大將（明治四十四年七月）
賀茂丸船上（明治四十四年）
米國シヤトル市通行（明治四十四年八月二十八日）
英國倫敦少年軍檢閱（明治四十四年六月三十日）
御大典に參列せんとする元帥（昭和三年十一月十日京都に於て）
御大典大饗宴第一日記念撮影（昭和三年十一月十一日京都華族會館前）
同上御大典參列の海將
英國東洋艦隊司令長官招待（明治四十一年五月二十九日）
伊太利東洋艦隊司令長官來る（昭和二年）
東鄕元帥筆蹟
三笠艦上記念撮影（昭和四年十二月七日）
壽府會議時代（昭和二年七月三十日）
御陪食の榮に浴して（昭和二年五月十八日）
倫敦會議に就き葉山へ奉答文を捧げる列車中（昭和五年七月二十三日）
倫敦會議時代（昭和五年四月一日）岡田大將、東鄕元帥、加藤軍令部長
元帥の或る日
海軍省玄關に於ける元帥（昭和四年八月二日）
日本海々戰二十五周年記念日の自邸前（昭和五年五月二十七日）
少年東鄕會發會式（昭和四年五月二十七日）
伊太利ノビレ少將と元帥（昭和二年三月六日）
海洋少年團（昭和七年二月）
少年東鄕會の少女會員の年賀（昭和七年一月二日）
女學校講堂に於ける元帥（昭和四年十月二十三日）
大妻高女訪問（昭和四年十月二十三日）
玄關前の元帥
人形使節と元帥（昭和八年六月十六日）

三笠艦上記念撮影（昭和四年十二月七日）
壽府會議時代（昭和二年七月三十日）
御陪食の榮に浴して（昭和二年五月十八日）
倫敦會議に就き葉山へ奉答文を捧げる列車中（昭和五年七月二十三日）
倫敦會議時代（昭和五年四月一日）岡田大將、東郷元帥、加藤軍令部長
元帥の或る日
海軍省玄關に於ける元帥（昭和四年八月二日）
日本海々戰二十五周年記念日の自邸前（昭和五年五月二十七日）
少年東郷會發會式（昭和四年五月二十七日）
伊太利ノビレ少將と元帥（昭和二年三月六日）
海洋少年團（昭和七年二月）
少年東郷會の少女會員の年賀（昭和七年一月二日）
女學校講堂に於ける元帥（昭和四年十月二十三日）
大妻高女訪問（昭和四年十月二十三日）
玄關前の元帥
人形使節と元帥（昭和八年六月十六日）
晩年の東郷元帥・和裝・通常服・夏服
御製　御歌　東郷元帥謹書
靖國神社臨時大祭參拜（昭和四年四月二十三日）
喜字　珠盡讃　米壽字
日露凱旋に際して恩賜金時計（鉛筆は内親王殿下より拜領、磁石は外遊の節米人より贈らる）
昭憲皇太后御遺品、御下賜菓子器
軍令部長時代の硯箱、元帥徽章、元帥刀
日本海々戰に脚下に落ちた彈片の置物
同上双眼鏡・時計
日露戰役當時の軍刀
上六番町東郷邸門
同上東郷邸玄關
東郷坂記念道標
病氣前の元帥
ラヂオ放送（昭和七年一月四日）
元帥の令孫
自邸庭前の元帥（大正十年五月三日）
母堂益子刀自
元帥夫妻
元帥の家族（大正十五年十二月二十二日）
圍碁の元帥
靈前の花籠（昭和九年六月一日）
元帥の病室
爵記を捧持する二令息（昭和九年五月二十九日）
小笠原子爵元帥の容躰を記者團に發表す（昭和九年五月二十九日）
海兵の御見舞（昭和九年五月二十九日）
東郷邸の見舞客（昭和九年五月二十九日）
東郷邸一般禮拜者（昭和九年六月三日）
元帥邸前の發喪（昭和九年五月三十日）

三笠の半旗（昭和九年五月三十日）
元帥靈前（昭和九年五月三十一日）
首相官邸に於ける哀悼放送（昭和九年五月卅日）
　右より大角海相、林陸相、小笠原子爵
多磨墓地下檢分（昭和九年五月三十一日）
多磨墓地平面圖
多磨墓地清祓式（昭和九年五月三十一日）
日比谷葬場の建築工事（昭和九年六月三日）
多磨墓地建築工事（昭和九年六月三日）
靈柩曳進豫行（昭和九年六月四日）
賜誄の儀（昭和九年六月四日）
靈柩東郷邸を出づ（國葬當日）
葬列九段靖國神社横を過ぐ（國葬當日）
葬列濠端を過ぐ（國葬當日）
元帥刀及び勳章捧持（國葬當日）
靈柩日比谷正門に入る（國葬當日）
閑院宮殿下御參列（國葬當日）
伏見宮兩殿下御參列（國葬當日）
閣僚顯官參列（國葬當日）
靈柩日比谷葬場に著く（國葬當日）
齋場に赴く遺族（國葬當日）
日比谷葬場の齋場前（國葬當日）立てるは喪主彪氏
日比谷齋場の一般參拜者（國葬當日）
日比谷齋場の參列者拜禮（國葬當日）
各國儀仗兵集る（國葬當日）
伊太利海軍儀仗兵（國葬當日）
軍艦の弔砲（國葬當日）
海洋少年團送葬（國葬當日）
女學生の送葬
沿道の送葬者
日比谷送葬者の混雜
靈柩多磨墓地に入る（國葬當日）
多磨墓地斂葬場（國葬當日）

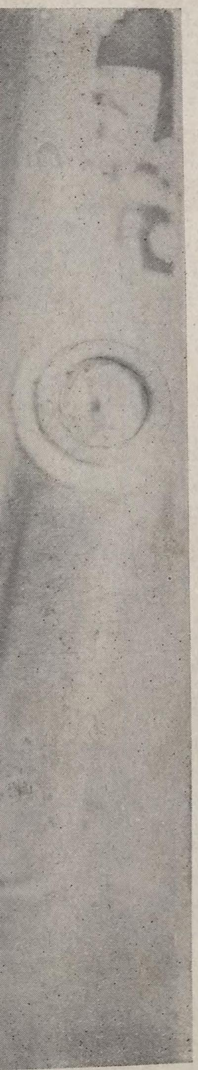


日本海々戰に於ける三笠艦橋の東鄕司令長官（東條鉦太郎筆）

伊太利海軍儀仗兵（國葬當日）
軍艦の弔砲（國葬當日）
海洋少年團送葬（國葬當日）
女學生の送葬
沿道の送葬者
日比谷送葬者の混雜
靈柩多磨墓地に入る（國葬當日）
多磨墓地斂葬場（國葬當日）

勳大 1.　　章勳

章勳鵄金級一功 4.　　章副上同 3.　　章綬大花菊位勳大 2.　　飾頸章花菊位勳大 1.　　**章勳**

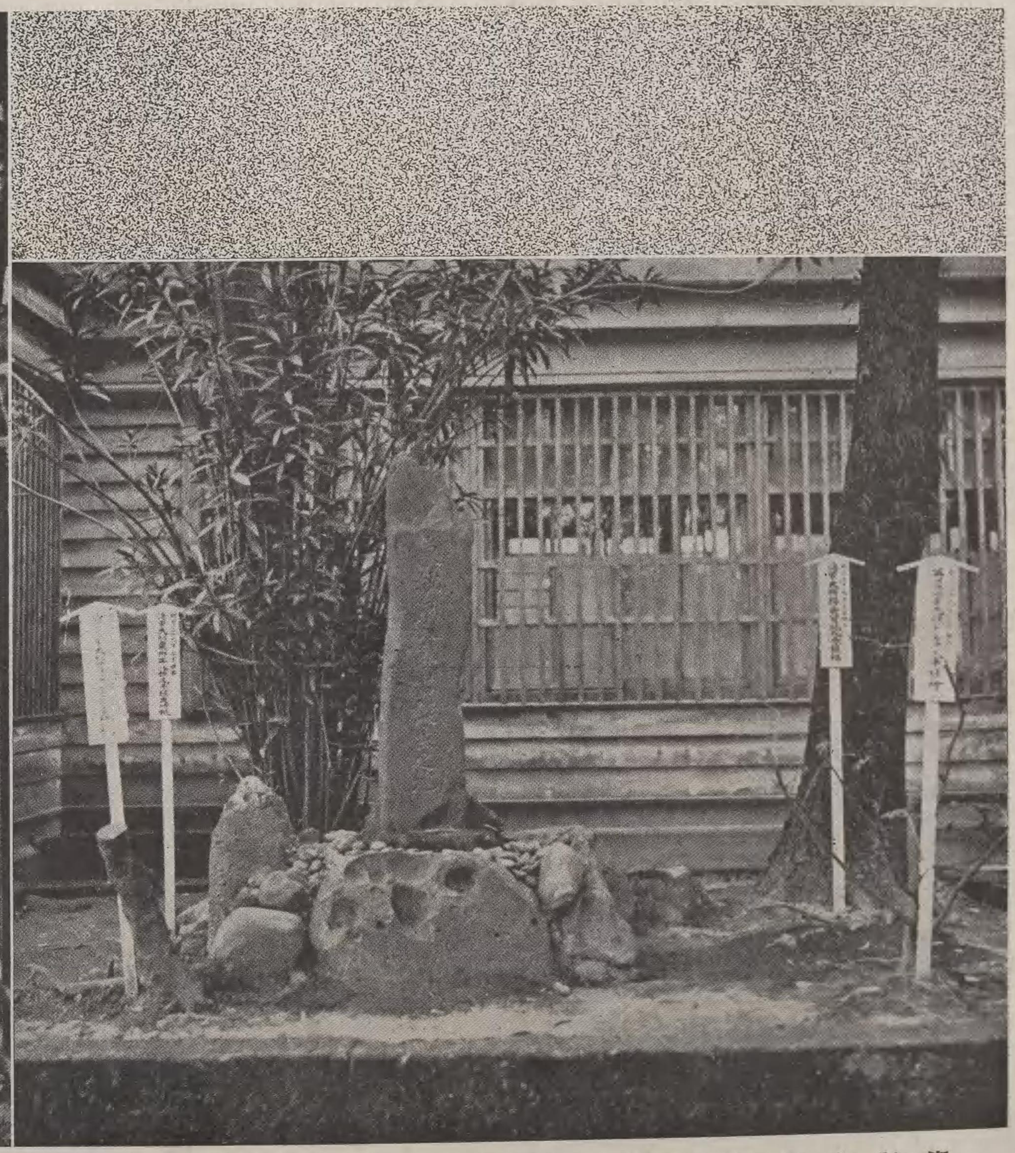


三笠艦上の聖上陛下と東郷元帥

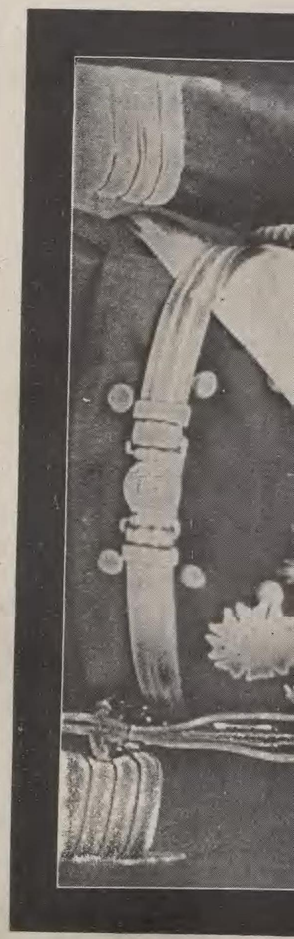
鹿兒島東

東郷元帥肖像

神戸の東郷井戸

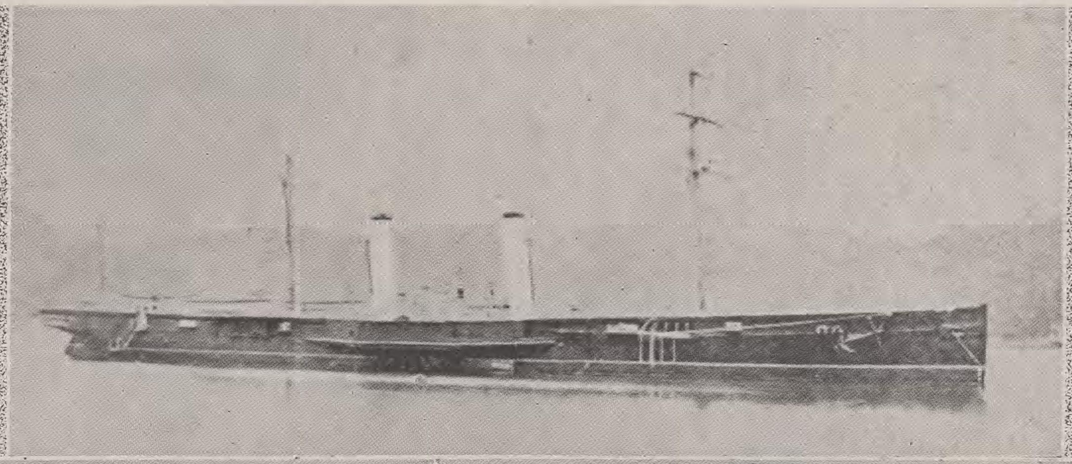


鹿児島東郷元帥生誕地



東郷元帥骨像

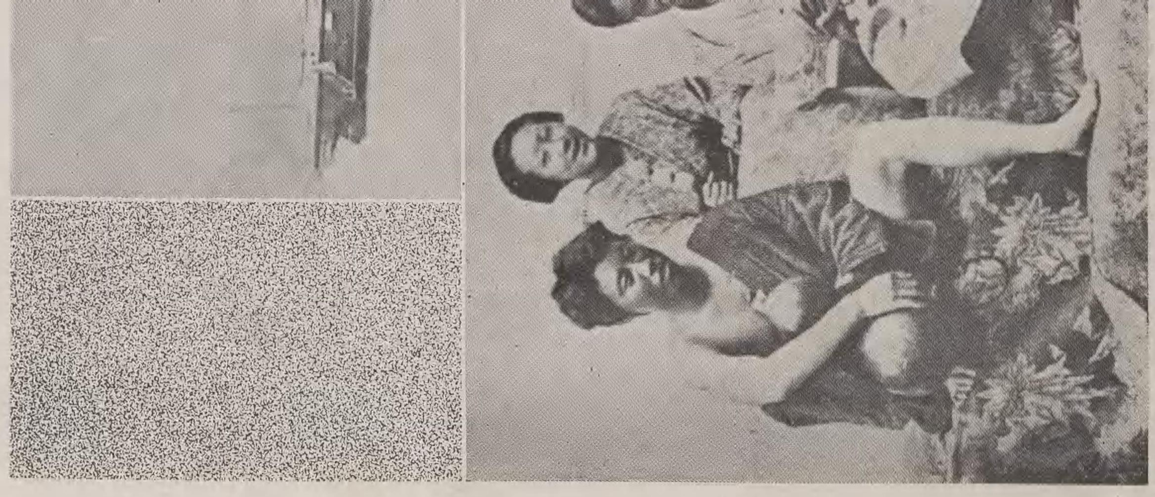
薩艦春日



二十三歳の撮影（前列右が元帥）

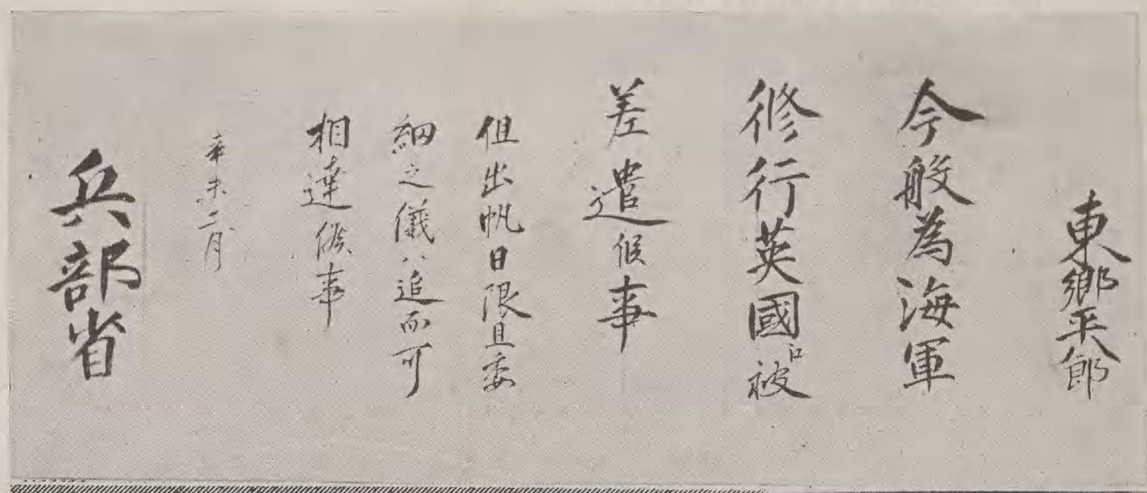
春日艦時代（後列右端が元帥）

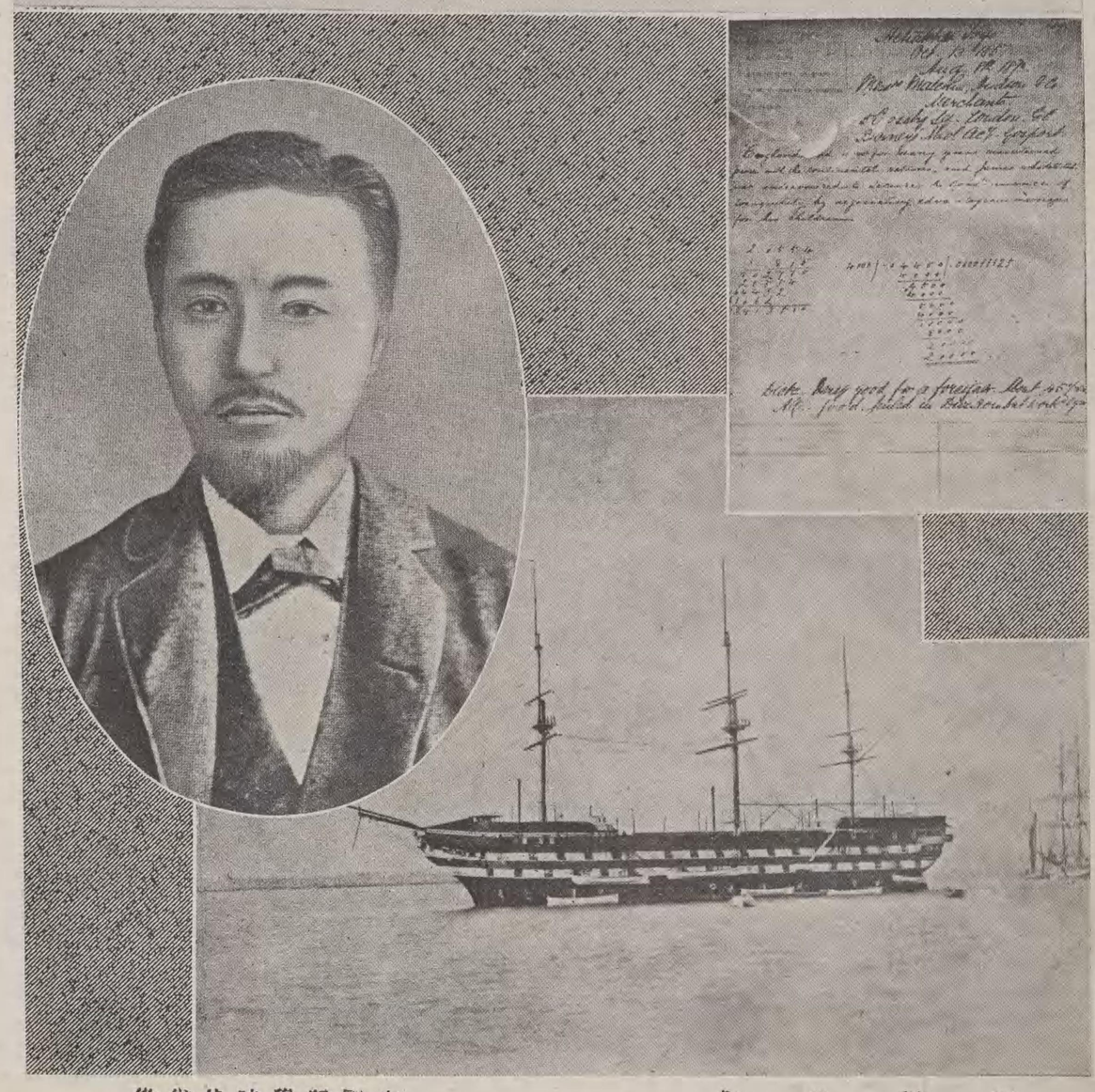
合辭學留國英年四治明



（帥元が右列前）影撮の

明治四年英國留學辭令

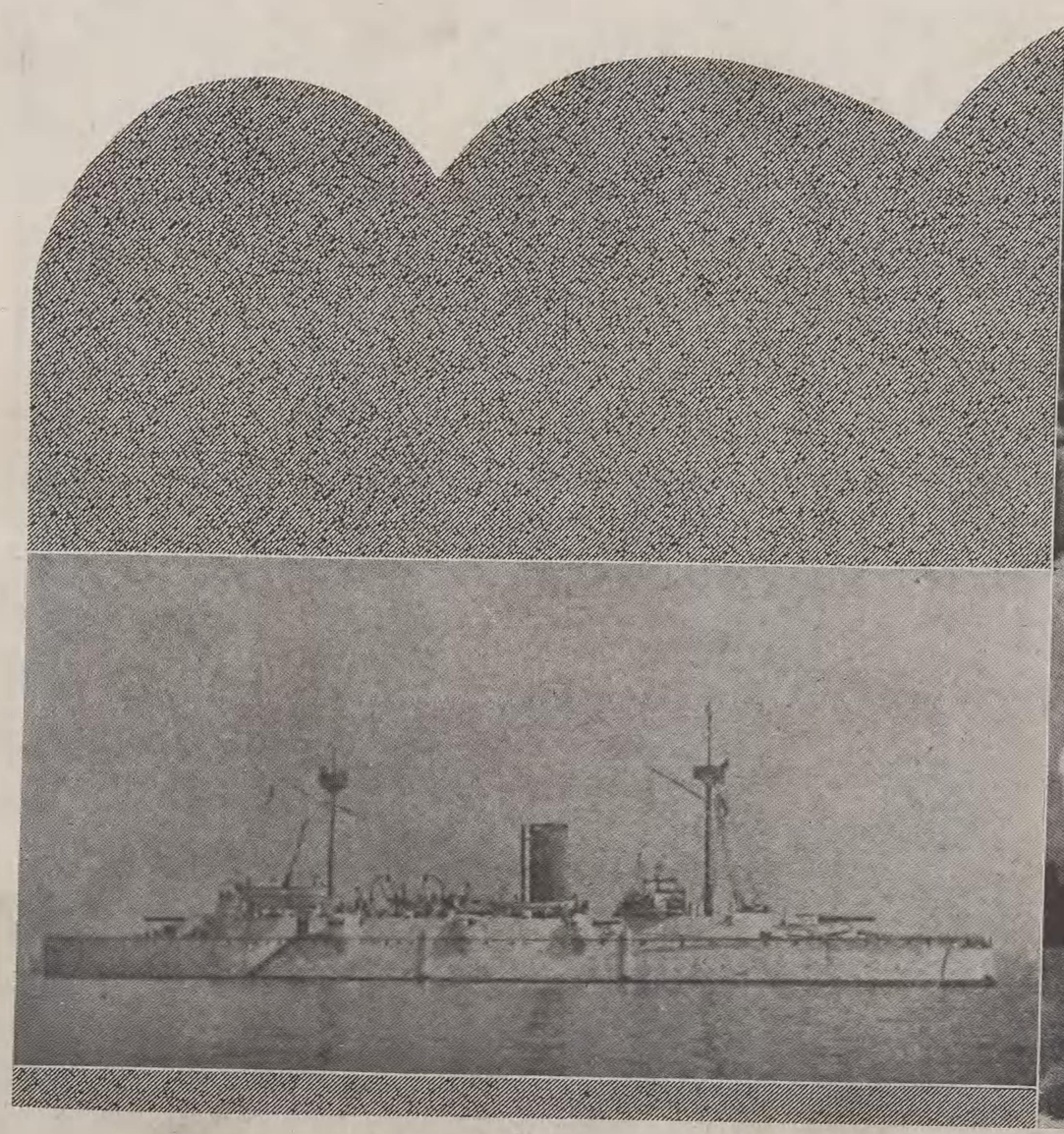




英國留學時代肖像

軍艦比叡

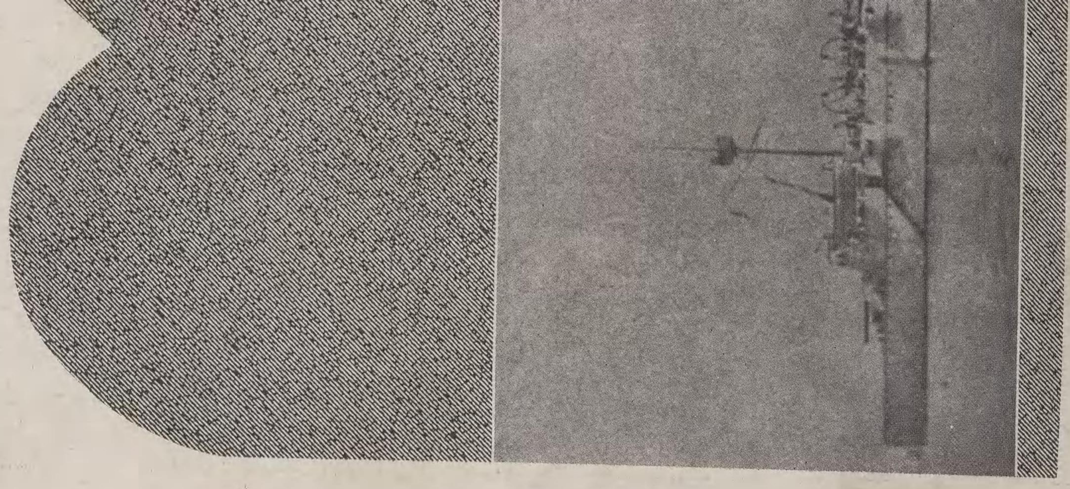
ウースター乗組時代試験答案



浪速艦

浪速艦長時代（明治二十七年）

ろいの帥元郷東



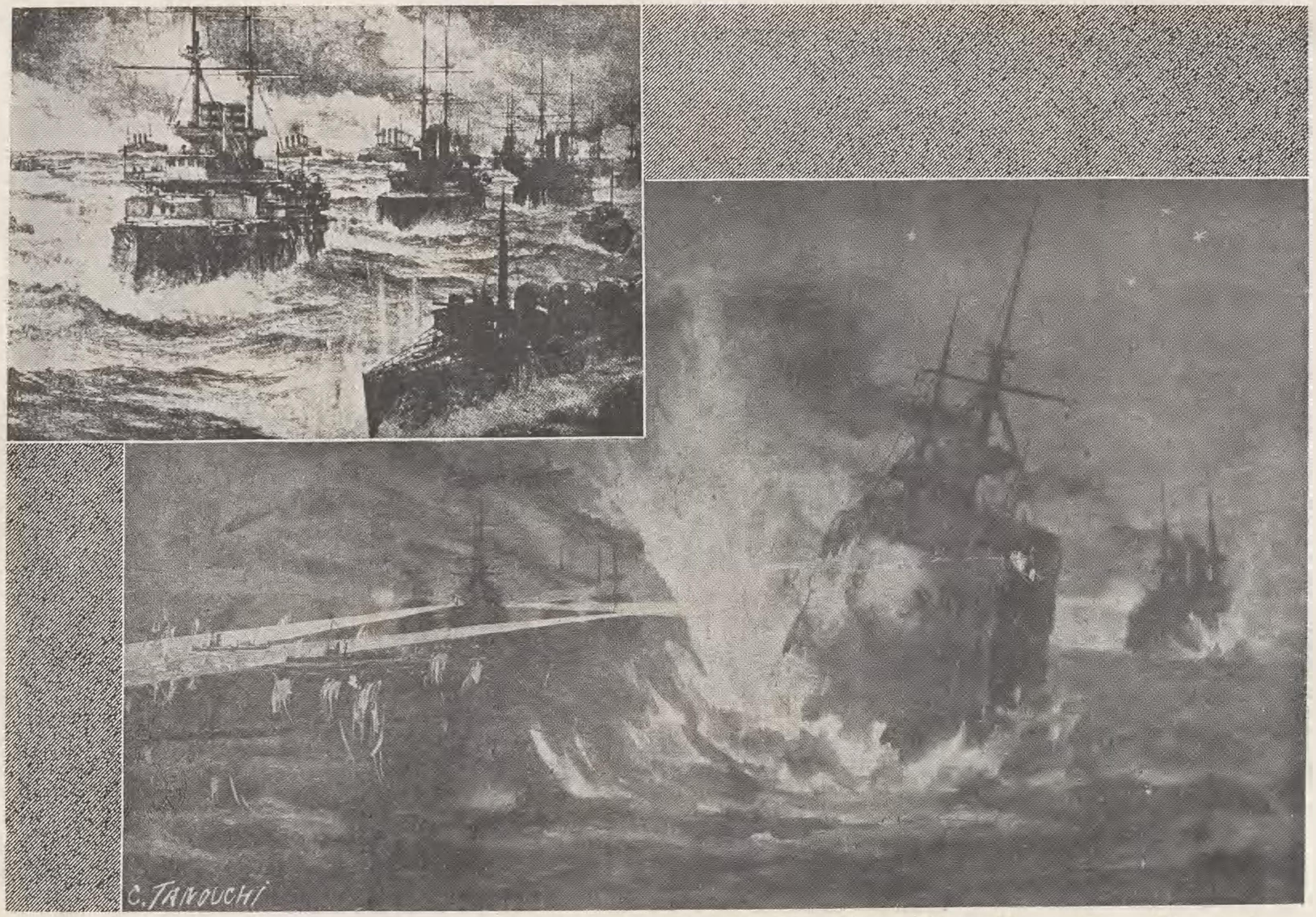
東鄕元帥のいろいろ

(1)來客に接す　(2)明治十二年肖像　(3)通常服　(4)病を得る前
(5)皇國興廢　(6)旅順記念撮影　(7)海軍大尉時代自署　大禮服

聯合艦隊司令長官時代

旅順

英國畫家の旅順口外の我艦除圖



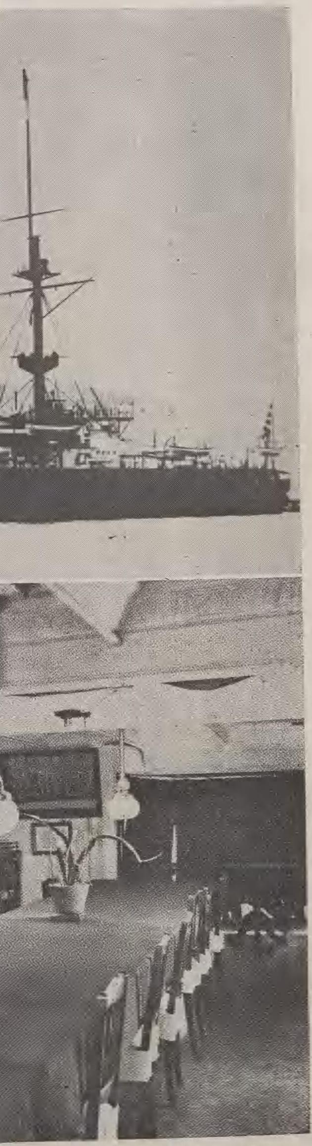
旅順口海戰圖（明治三十七年二月八日の夜）

代時官長令司隊艦合聯

柳樹房第三軍

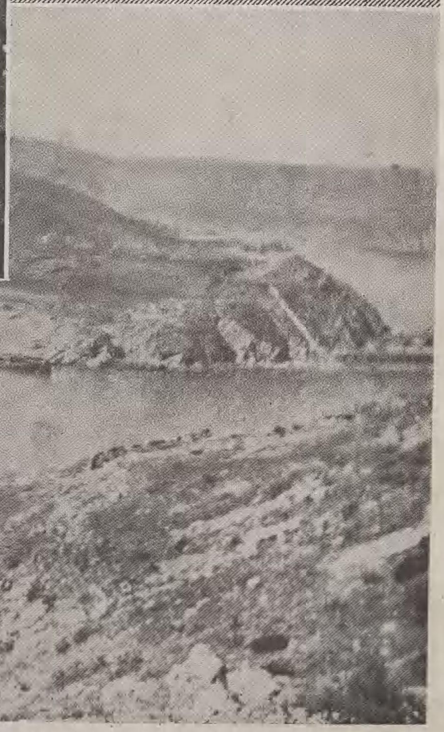
日露戰役三笠艦上の聯合艦隊司令部首腦

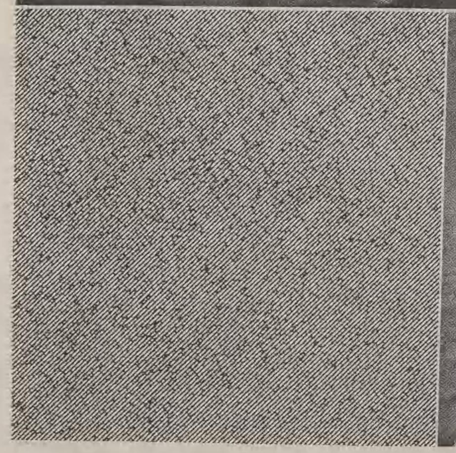
柳樹房第三軍司令部に於ける東郷乃木兩將軍（明治三十七年十二月二十日）



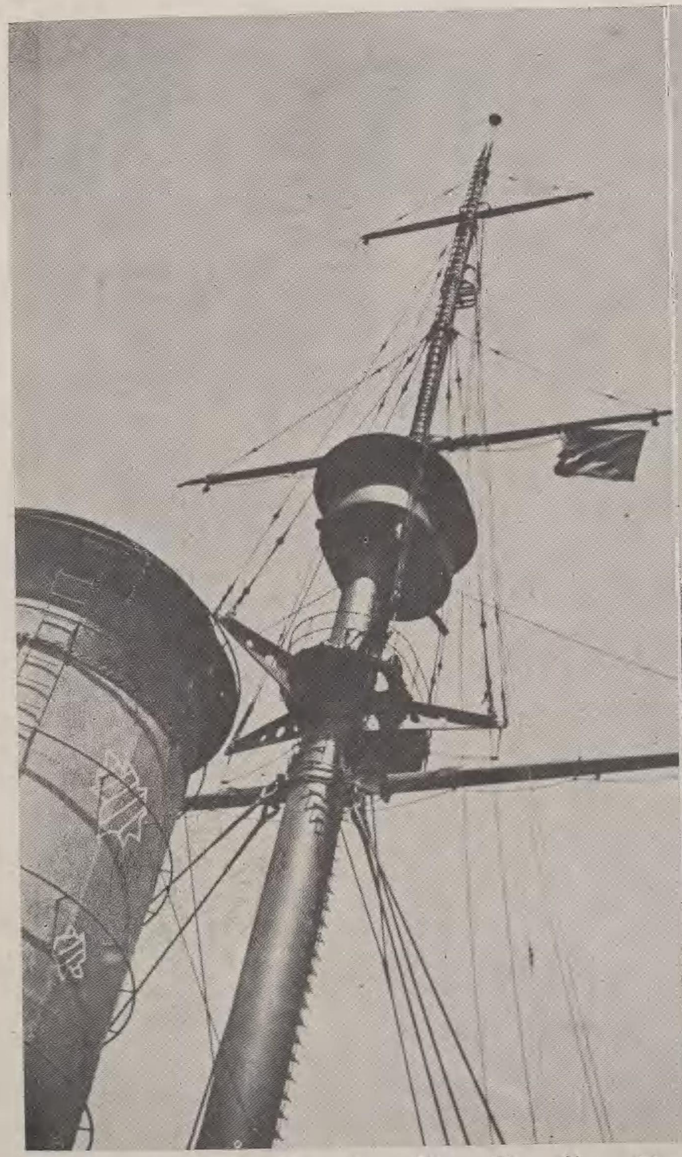
三笠艦内

旅順港内捕獲露艦（明治三十八年四月八日）

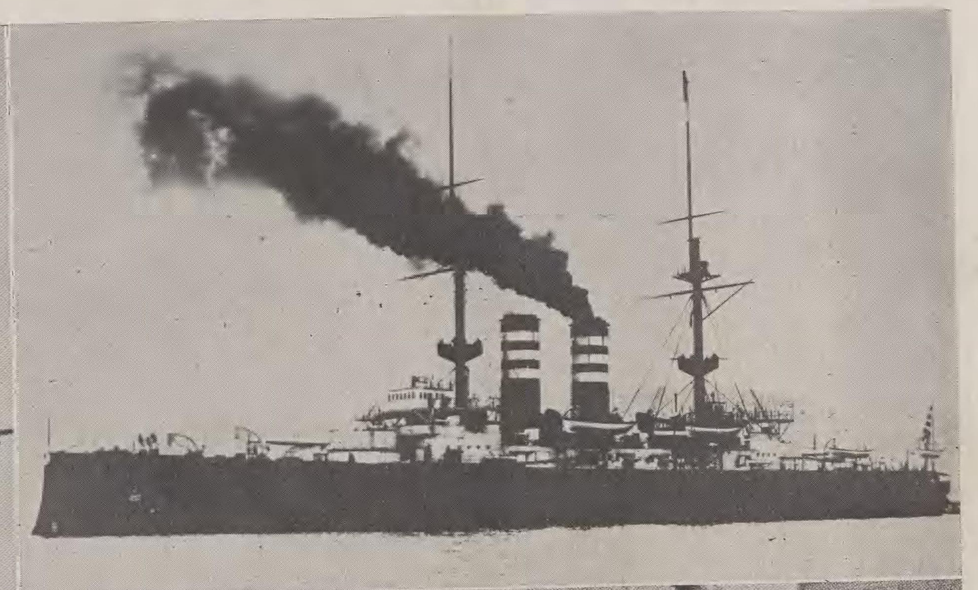




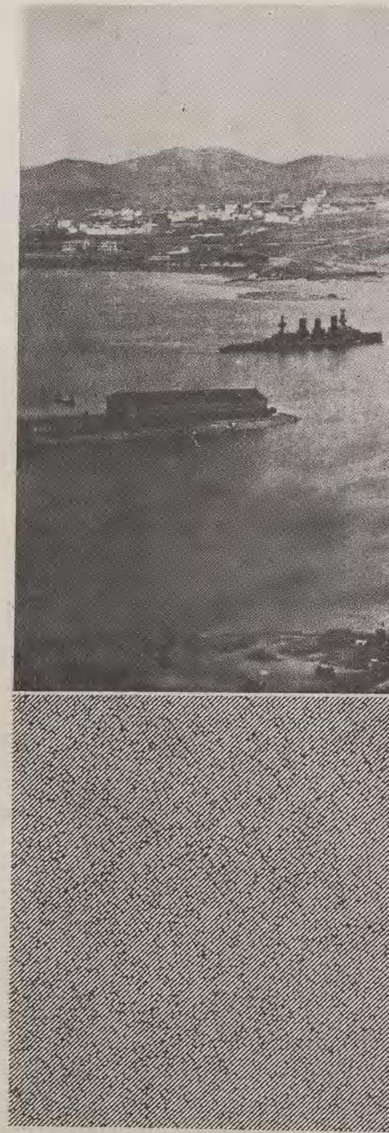
旅順口を閉塞したる千代丸・福井丸・彌彦丸・米山丸・報國丸



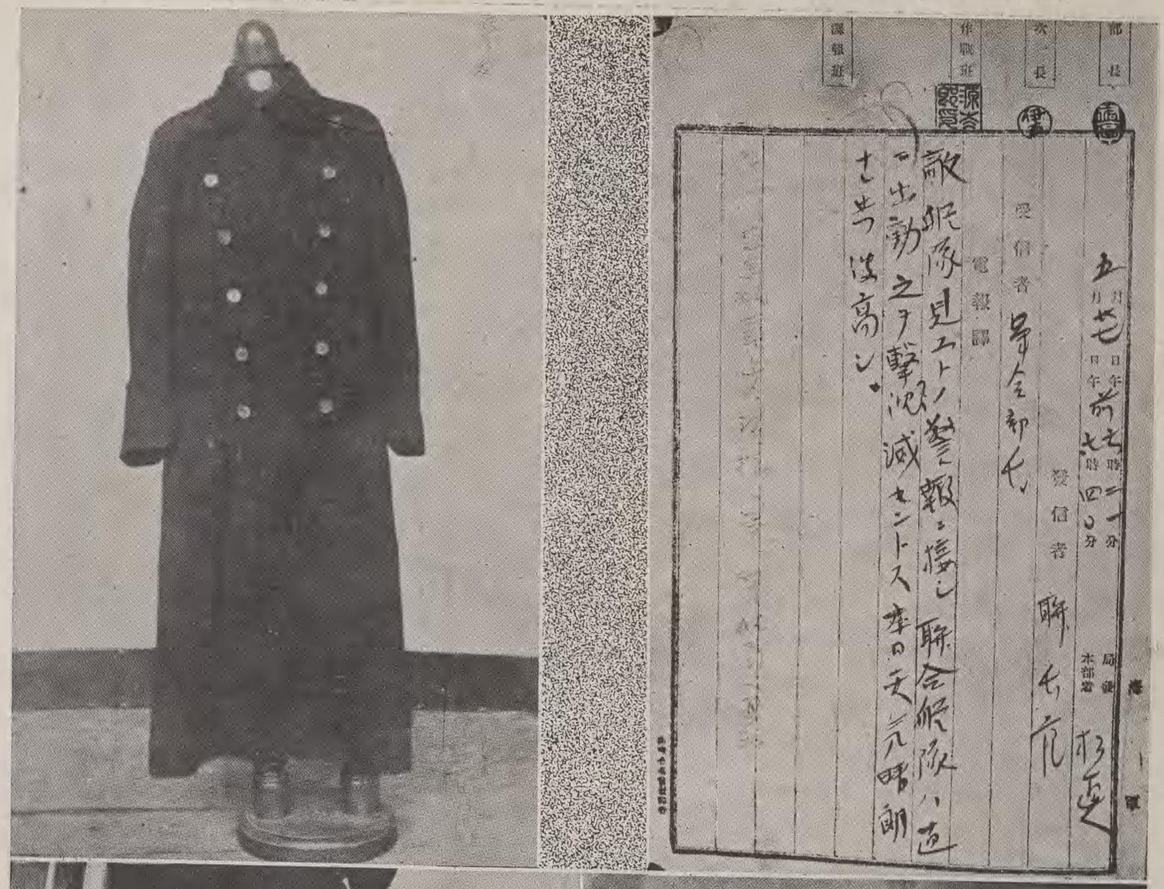
三笠艦檣Z信號



三笠艦內將官室



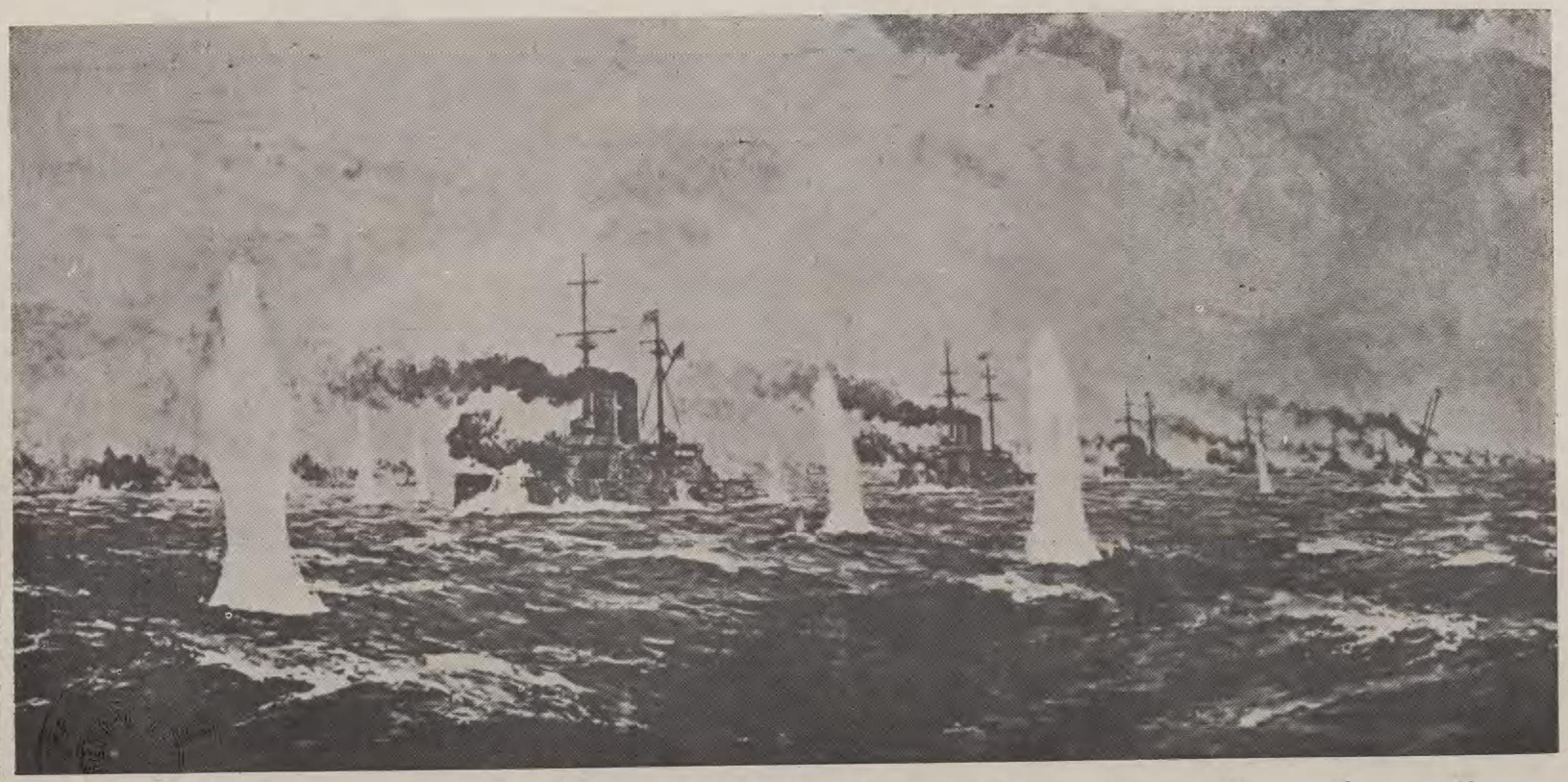
日本海々戰の歷史的快報
（明治三十八年五月二十七日）



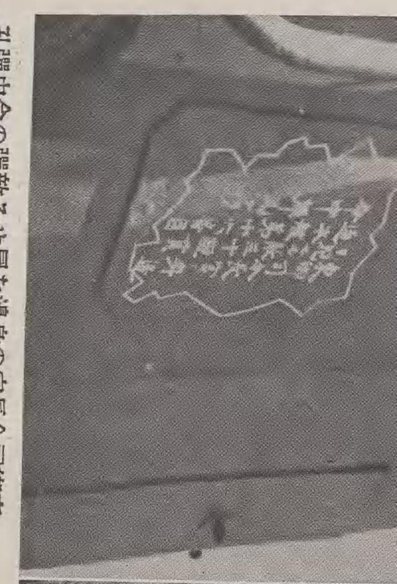
日露戰役當時著用の外套

東鄕司令長官の身邊を冒せる敵彈の命中彈孔

黃海々戰に於ける破損したる三笠大檣
（明治三十七年八月十日）



日本海々戰圖（東城鉦太郎筆）



孔彈中命の彈敵ろせ冒を邊身の官長令司鄕東

檣大笠三ゐし損破るけ於に戰々海黄
（日十月八年七十三治明）

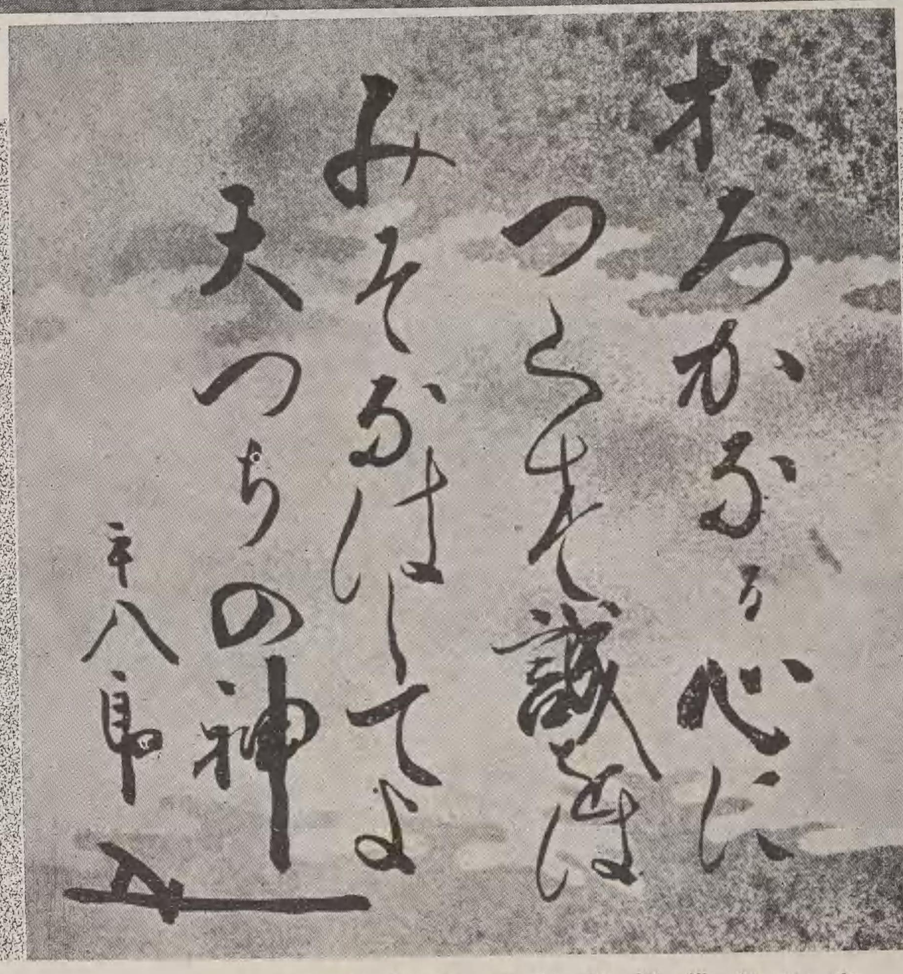
三笠奮戰圖（中村不折筆）

敵將ロゼストウエンスキーを佐世保病院に訪ふ圖

伊勢大廟參拜圖（明治三十八年十月九日）

敵將ロゼストウエンスキーを佐世保病院に訪ふ圖

伊勢大廟參拜圖（明治三十八年十月十九日）



東宮御學問所總裁拜命述懷

旅順白玉山表

東鄉司令長官帝都凱旋（明治三十八年十月二十二日）

聯合艦隊凱旋記念撮影

（明治三十八年十月二十二日）

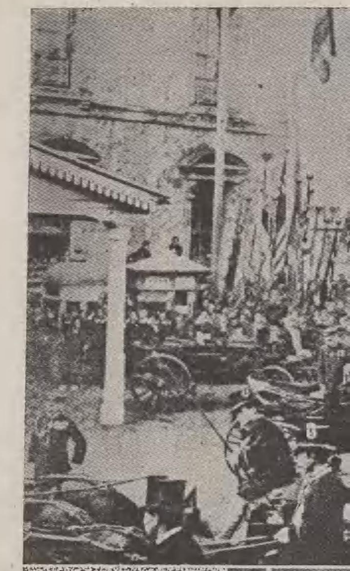
伊勢大廟前記念碑

鎭海灣記念塔

對馬日本海々戰記念碑

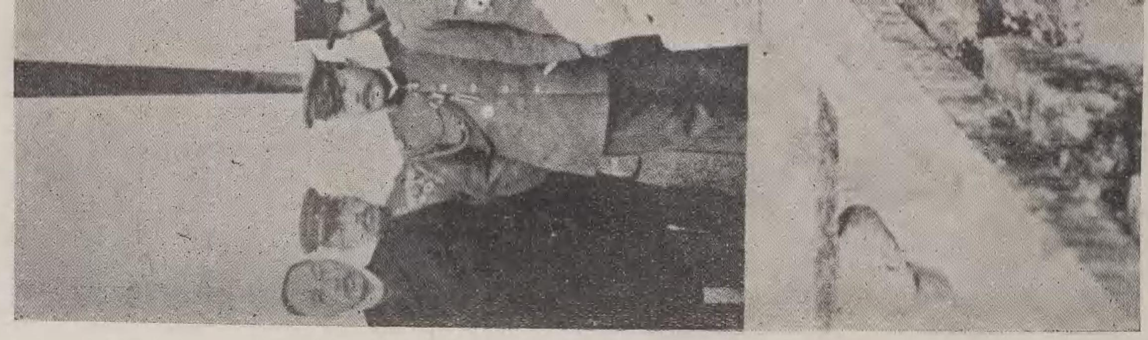
旅順白玉山表忠塔

（日二十二月十年八十三治



（日四十二月九年二和昭）終　年　十　五　洲　南　鄉　西

大　正　天　皇　御　渡　韓　供　奉　（明治四十年十月十八日）



西郷南洲五十年祭（昭和二年九月二十四日）

南洲墓前（明治三十九年）

英國少年と東鄉大將(明治四十四年七月)

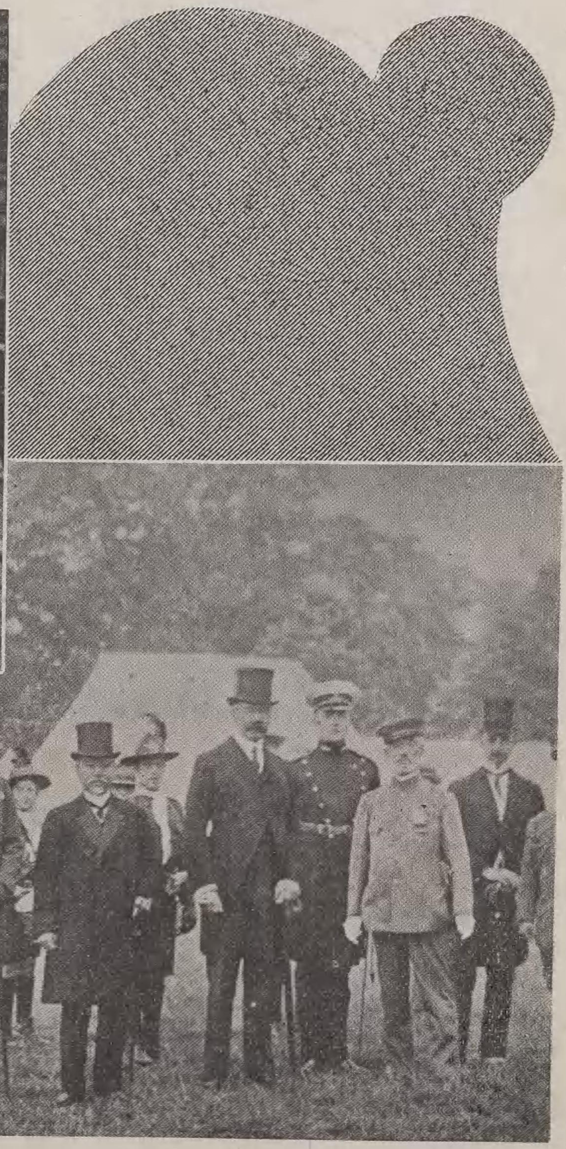
鴨猟（明治三十八年二月六日）

(年四十四治明)土船丸茂賀

(月七年四十四)

米國シヤトル市通行（明治四十四年八月二十八日）

英國倫敦少年軍檢閲圖（明治四十四年六月三十日）



御大典に参殿せんとする元帥（昭和三年十一月十日京都にて）

御大典大饗宴第一日記念撮影（昭和三年十一月京都華族會館前）

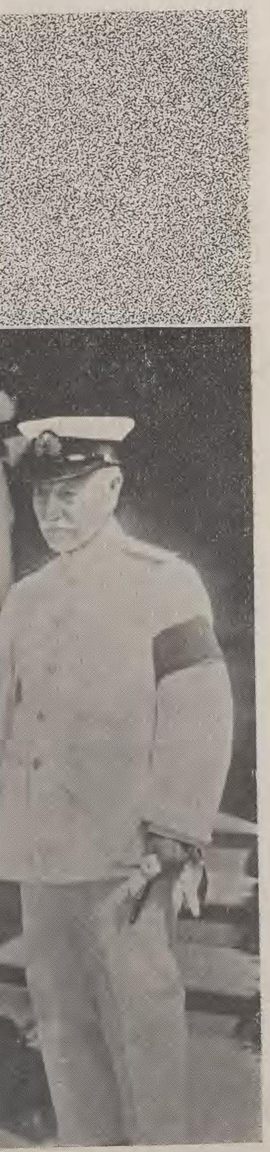
同上御大典參列の海將

英國東洋艦隊司令長官招待（明治四十一年五月二十九日）

同上御大典參列の海將

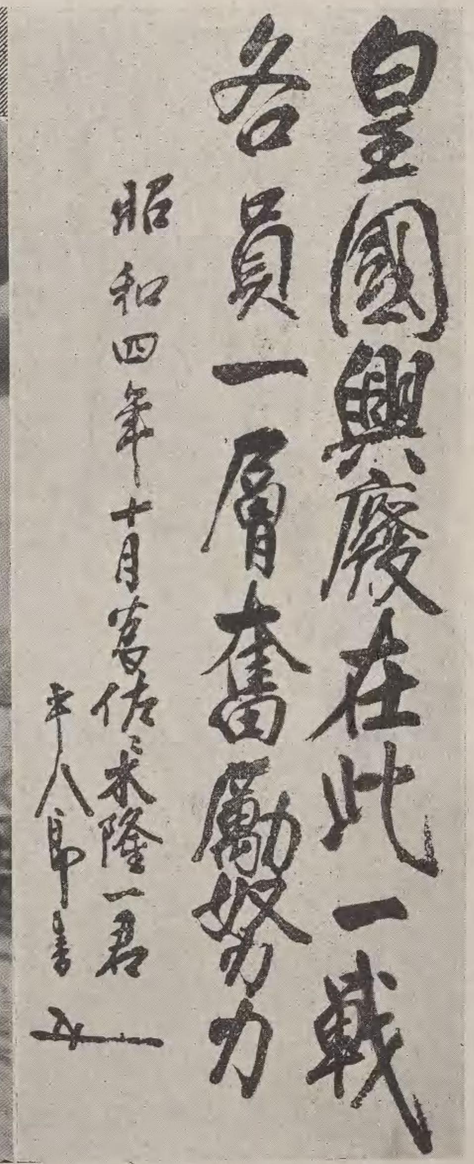
英國東洋艦隊司令長官招待（明治四十一年五月二十九日）

伊太利東洋艦隊司令長官來る（昭和二年）



壽府會

三笠艦上記念撮影（昭和四年十二月七日）



東鄉元帥筆蹟

御陪食の榮に浴して（昭和二年五月十八日）

壽府會議時代（昭和二年七月三十日）

（日七

倫敦會議に就き葉山へ奉答文を捧げる列車中　（昭和五年七月二十三日）

倫敦會議時代（昭和五年四月一日）

岡田大將・東郷元帥・加藤軍令部長

元帥の

海軍省玄關に於ける元帥（昭和四年八月二日）

元帥の或る日

（日一月四年五和昭）代時議會教倫

長部令軍藤加・帥元鄉東・將大田岡

少年東郷會

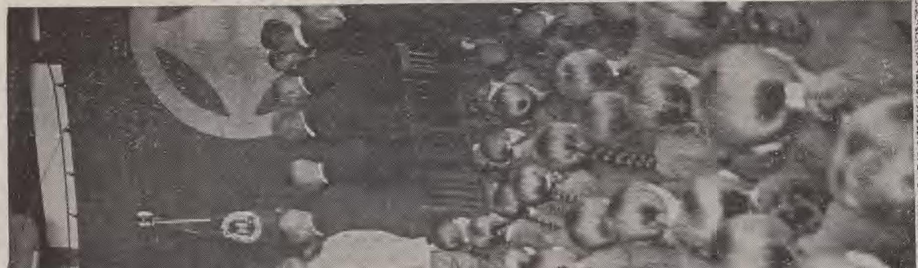
日本海々戰二十五週年記念日の自邸前（昭和五年五月二十七日）

伊太利ノビレ少將と元帥　（昭和二年三月六日）

少年東郷會發會式　（昭和四年五月二十七日）

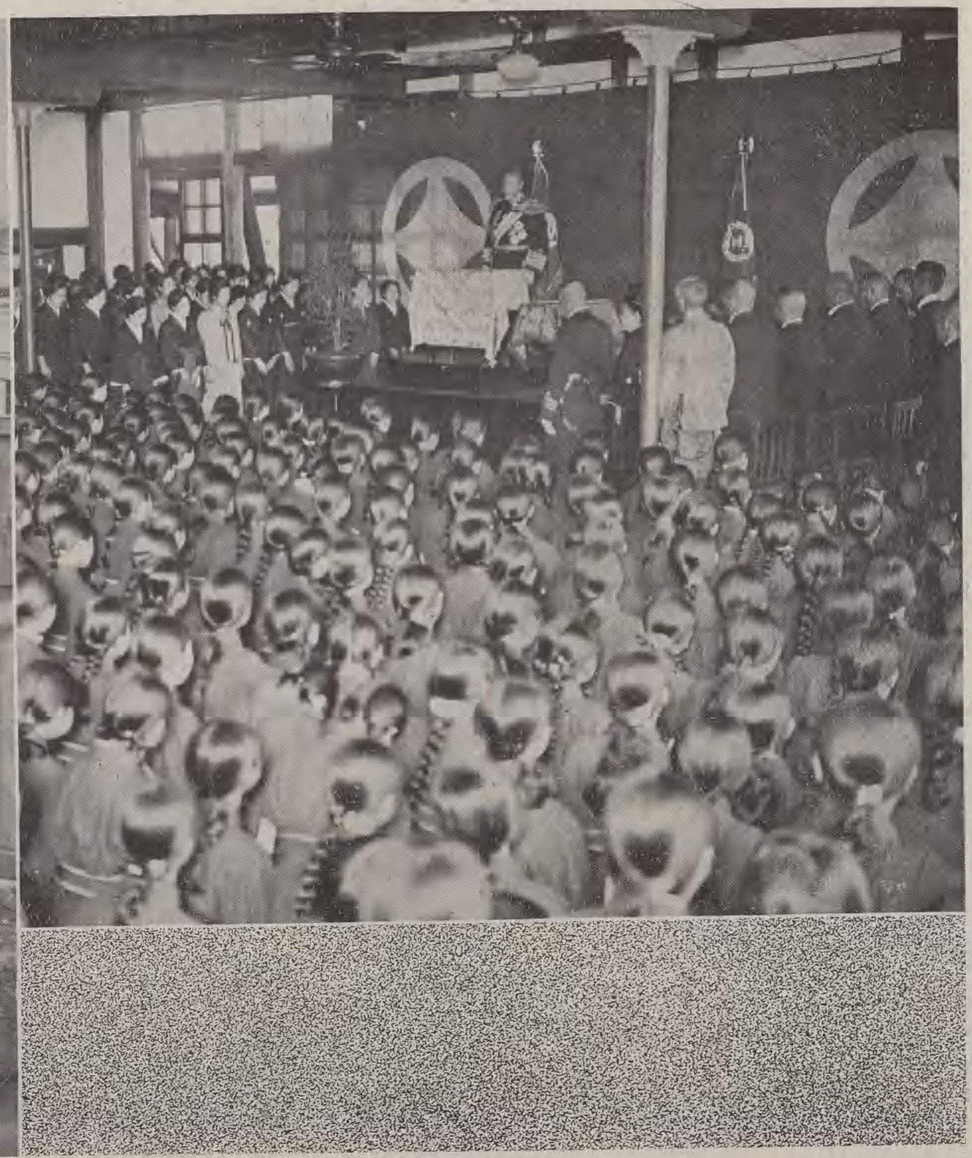
海洋少年團（昭和七年二月）

少年東郷會の少女會員の年賀（昭和七年一月二日）



女學校講堂

大妻高女訪問（昭和四年十月二十三日）



女學校講堂に於ける元帥（昭和四年十月二十三日）

（日二月一年七和昭）賀　年　の　員會女少の會鄉東年少

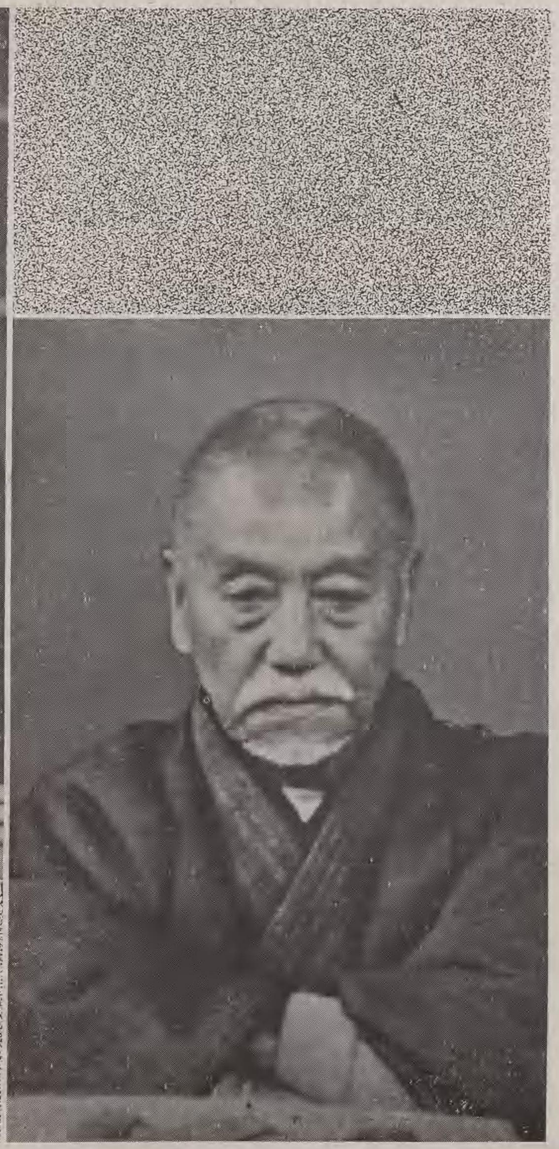
玄關前の元帥

人形使節と元帥（昭和八年六月十六日）

歸京の年腕

夏服

通常服



晩年の東郷元帥・和装

（日六十月六年八和昭）帥元と節使形人

御製・御歌　東郷元帥謹書

明治天皇　御製

折にふれて

家とみてあかねことなき身なりとも

人の勢めをおこたるなゆめ

昭憲皇太后御歌

金

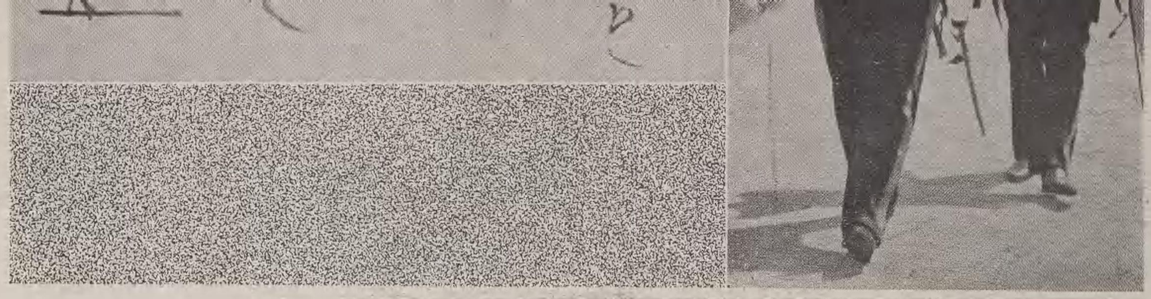
もしひとのことゝにとりてたからとも

なるとゝなるはこかねなれけり

伯爵東郷平八郎謹書

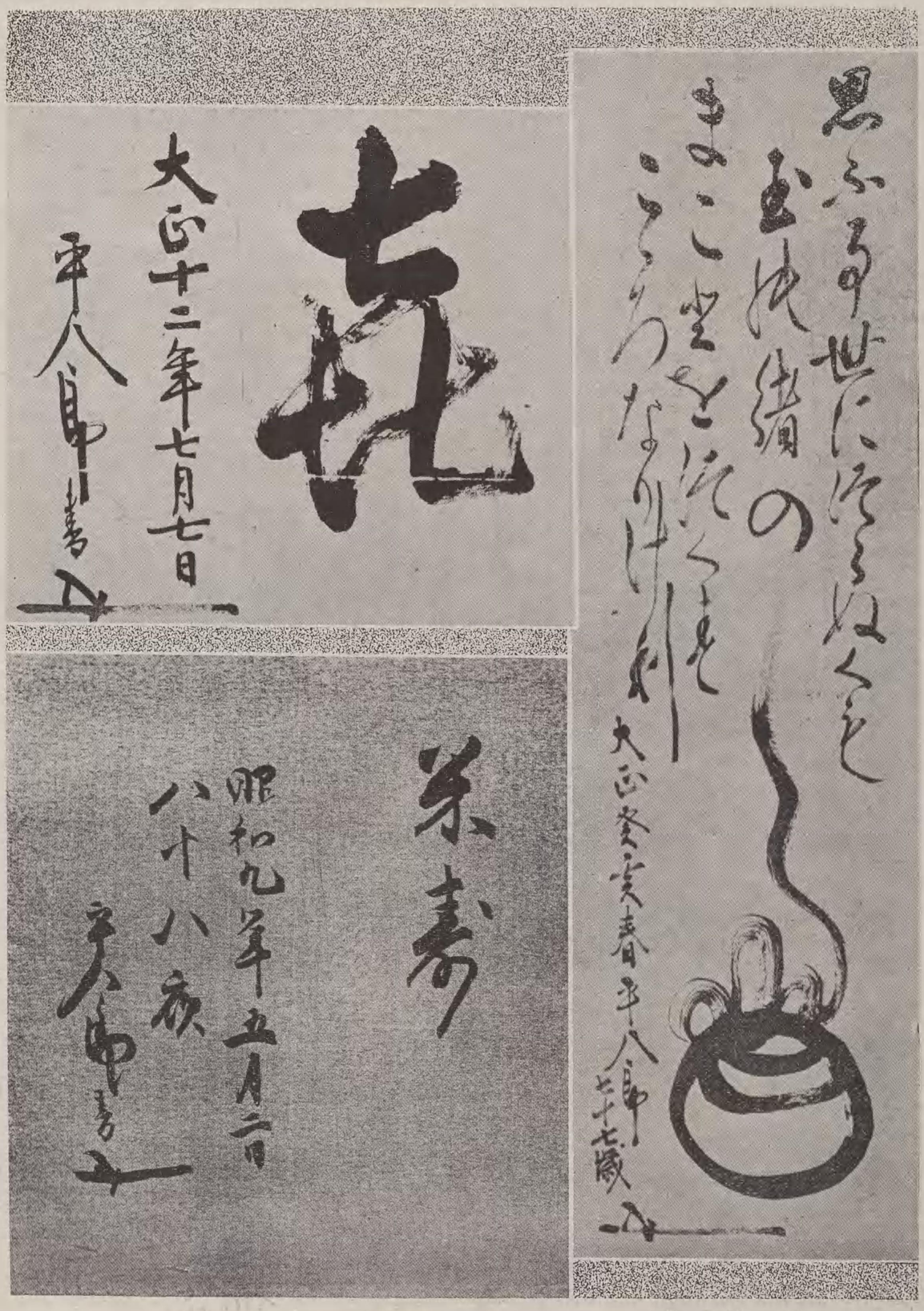
靖國神社臨時大祭參拜（昭和四年四月二十三日）

喜字



靖國神社臨時大祭參拜（昭和四年四月二十三日）

喜　字



珠畫讃

米壽字

代時長部令軍

日本海々戰に脚下に落

（るれら贈りよ人米節の遊外は石磁•領拝りよ下殿王親内は筆鉛）計時金賜恩てし際に旋凱露日

昭憲皇太后御遺品御下賜•菓子器

元帥徽章　　元帥刀

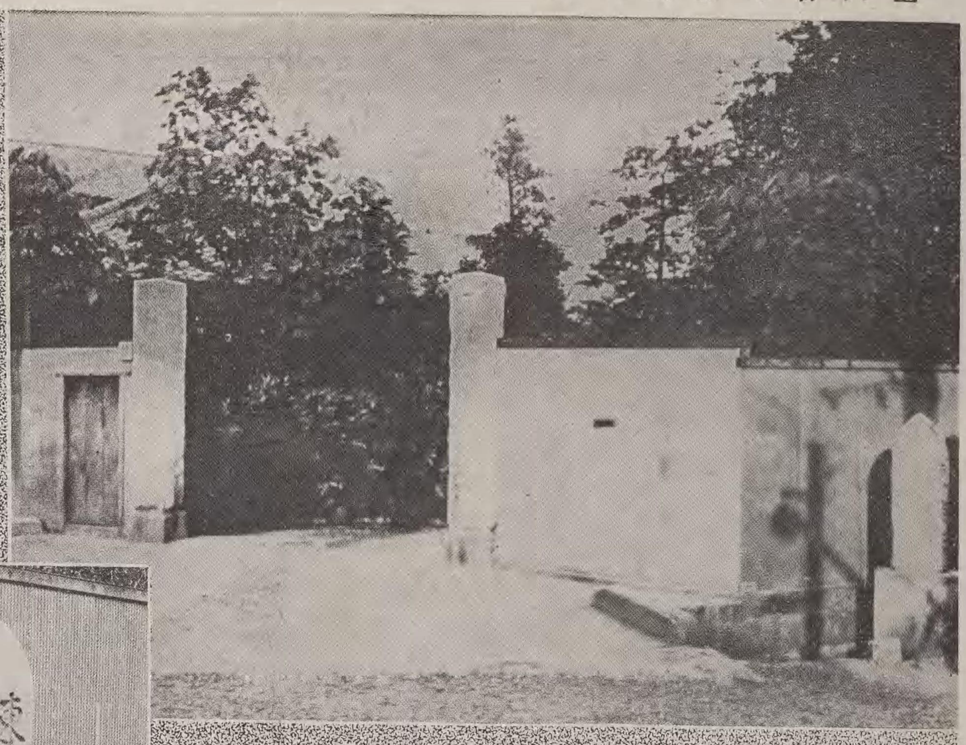
日露戰役當時の軍刀

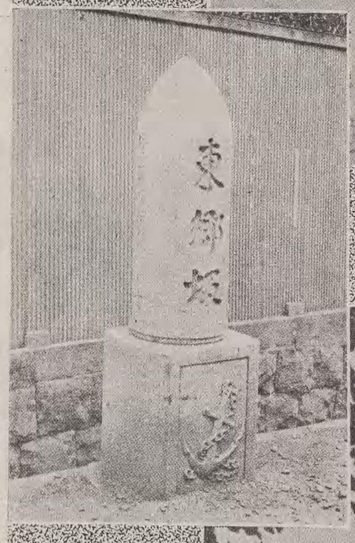
軍令部長時代の硯箱

日本海々戰に脚下に落ちたる片彈片の置物同上双眼鏡・時計

（これら贈りよ人米節の遊外

上六番町東鄕邸門

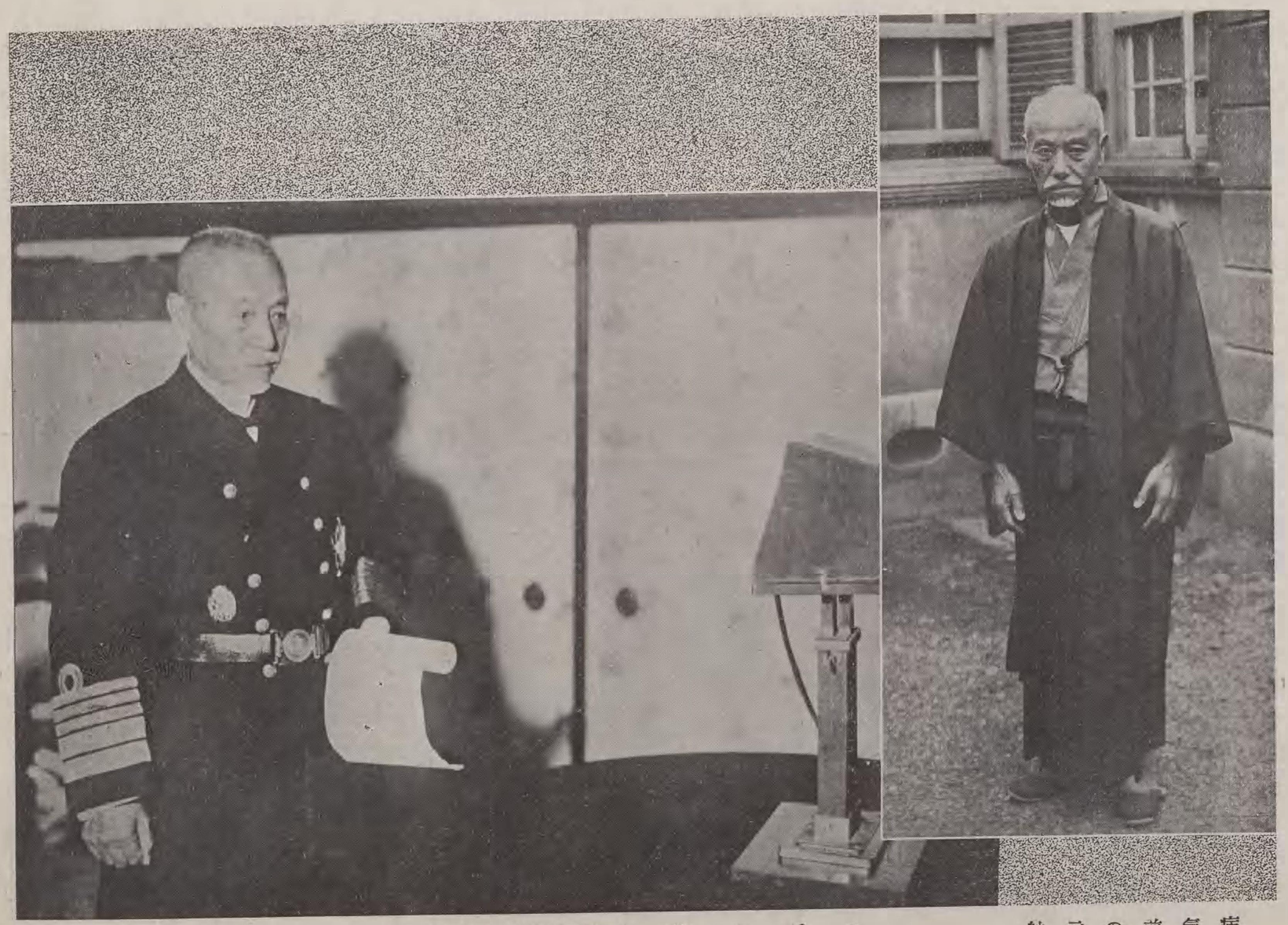




東鄕坂記念道標

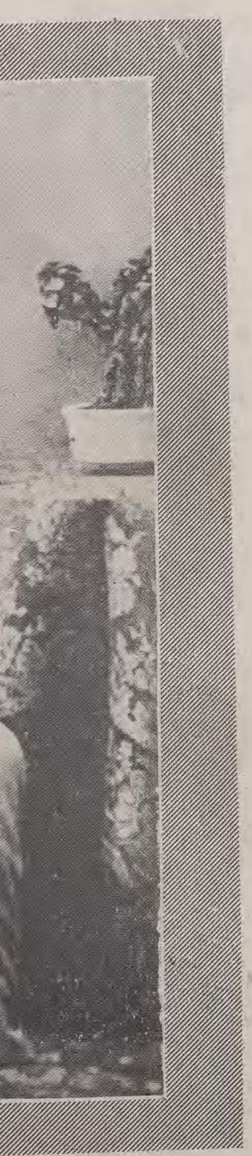
同上東鄕邸玄關

病氣前の元



病氣前の元帥　ラヂオ放送（昭和七年一月四日）

關玄邸鄉東上同



母堂益子

黒猫荘

自邸庭前の元帥（大正十年五月三日）

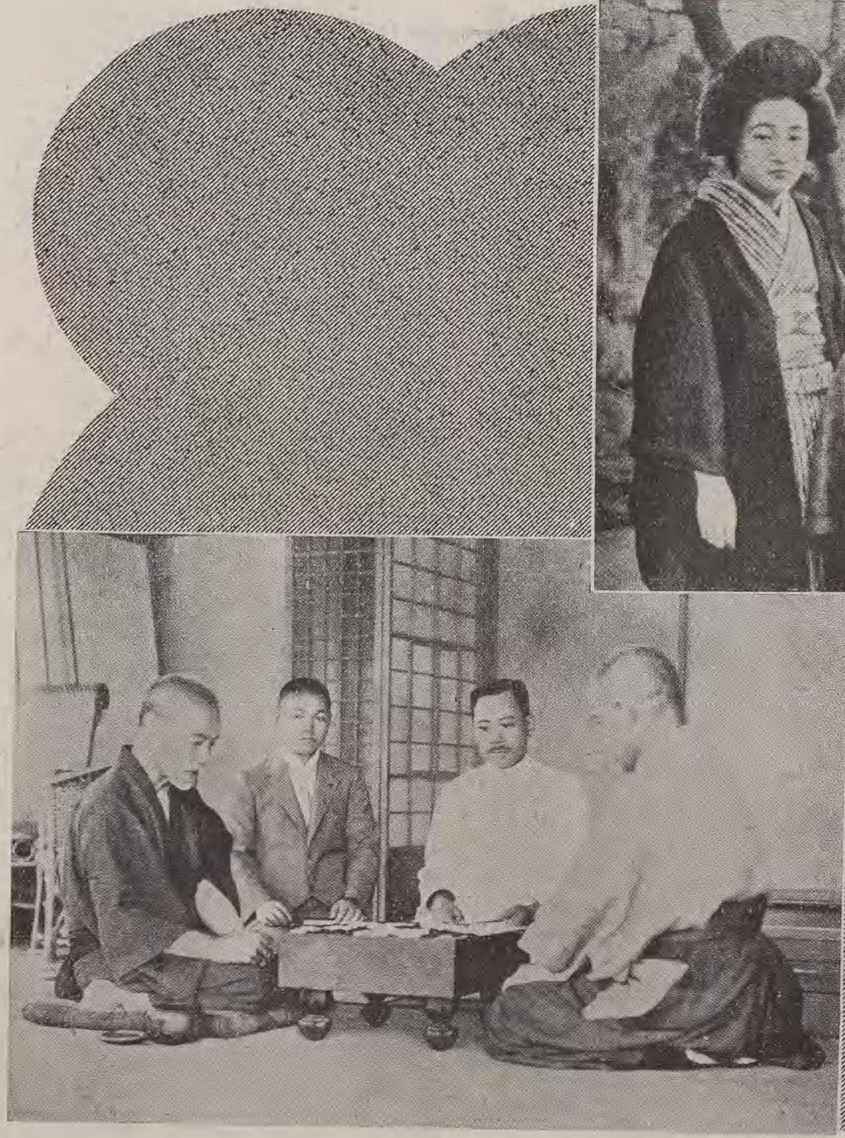
元帥夫妻

自刀子益堂母

の　帥　元

元帥の家族（大正十五年十二月二十二日）

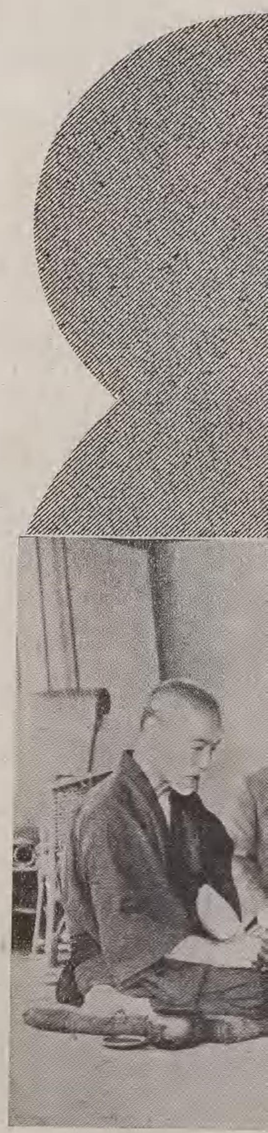
夫人とつ子　嗣子彪氏　令孫一雄氏　次女百子爵　元帥　令孫良子爵　嗣子百合子夫人



帥元の墓園

靈前の花籠（昭和九年六月一日）

元帥の病室



見の邸鄉東

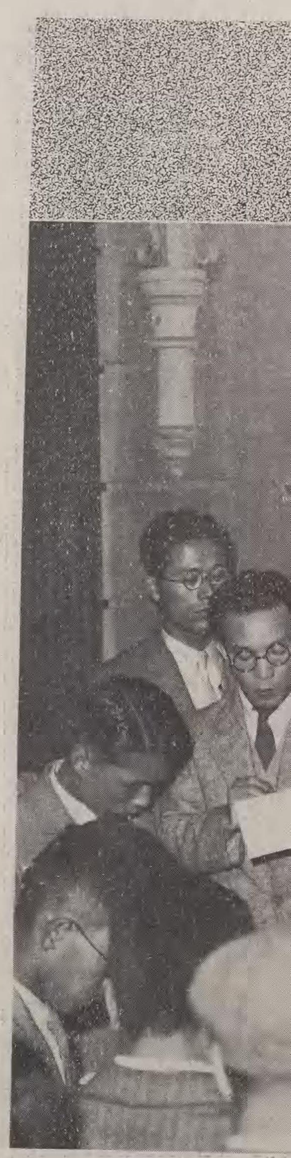
（日九十二月五年九和昭）す表發に團者記を躰容の帥元爵子原笠小

（日九十二月五年九和昭）息令二るす持奉記爵

海兵の御見舞（昭和九年五月二十九日）

東鄕邸一般禮拜者（昭和九年六月三日）

東鄕邸の見舞客（昭和九年五月二十九日）

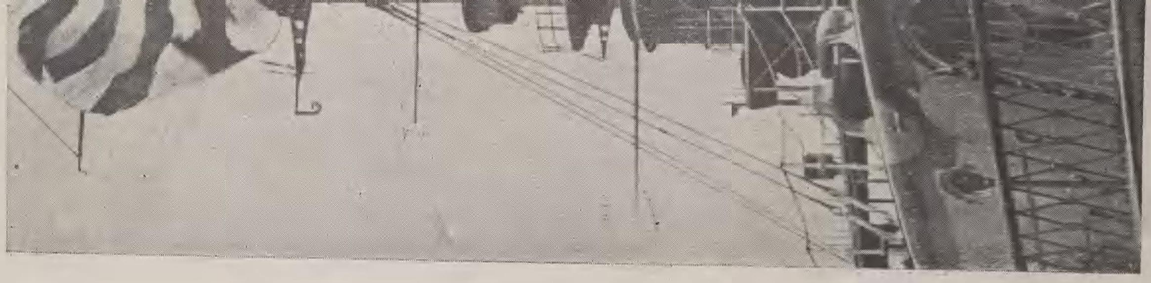


（日

元帥靈前（昭和九年五月三十一日）

三笠の半旗（昭和九年五月三十日）

元帥邸前の發喪（昭和九年五月三十日）



（日十三月五年

元帥靈前（昭和九年五月三十一日）

首相官邸に於ける哀悼放送（昭和九年五月卅日）右より大角海相・林陸相・小笠原子爵

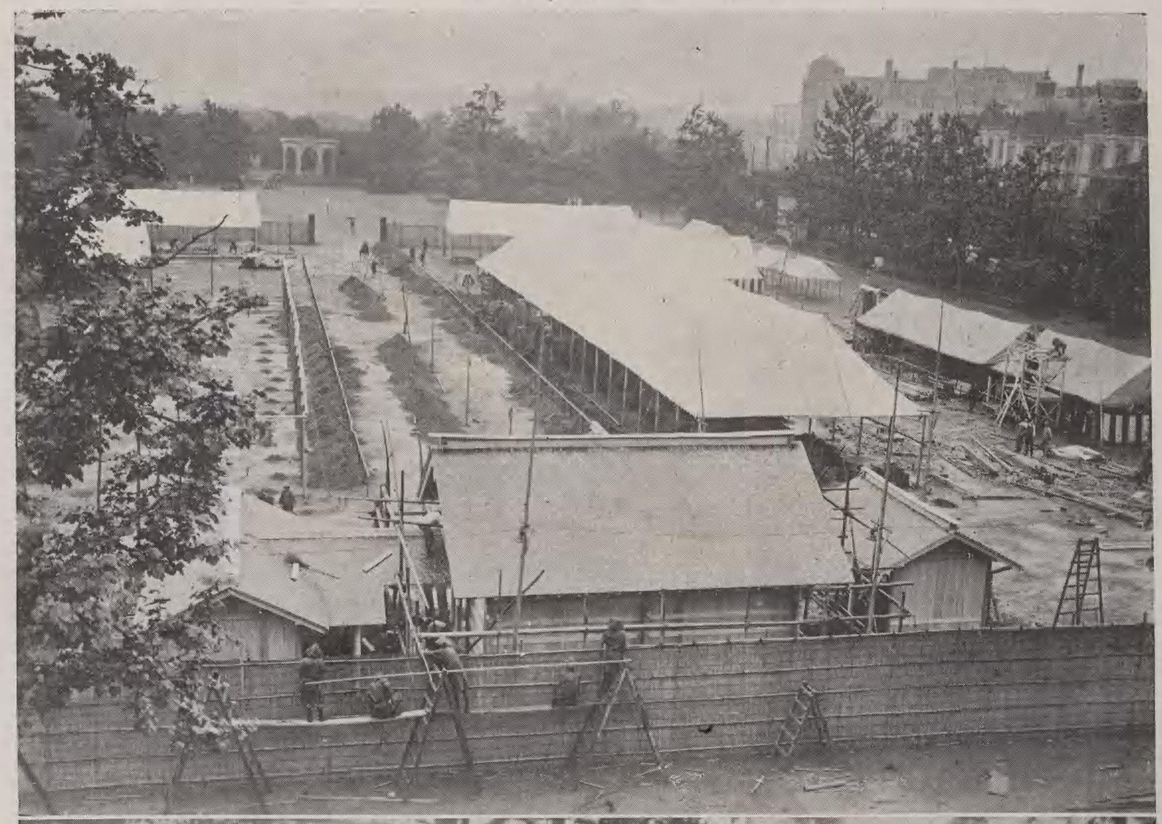
（日三月六年九和昭）事工築建の場葬谷比日

（日一十三月五年九和昭）分檢地墓磨多

多磨墓地祓清式（昭和九年五月三十一日）

多磨墓地平面圖

日比谷葬場の建築工事（昭和九年六月三日）



多磨墓地建築工事（昭和九年六月三日）

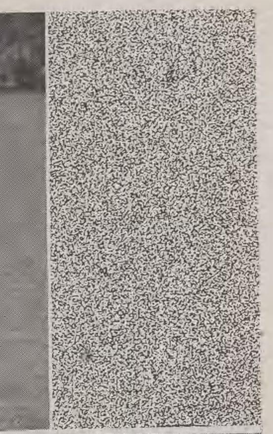
靈柩曳進豫行（昭和九年六月四日）

賜誄の儀（昭和九年六月四日）

靈柩東

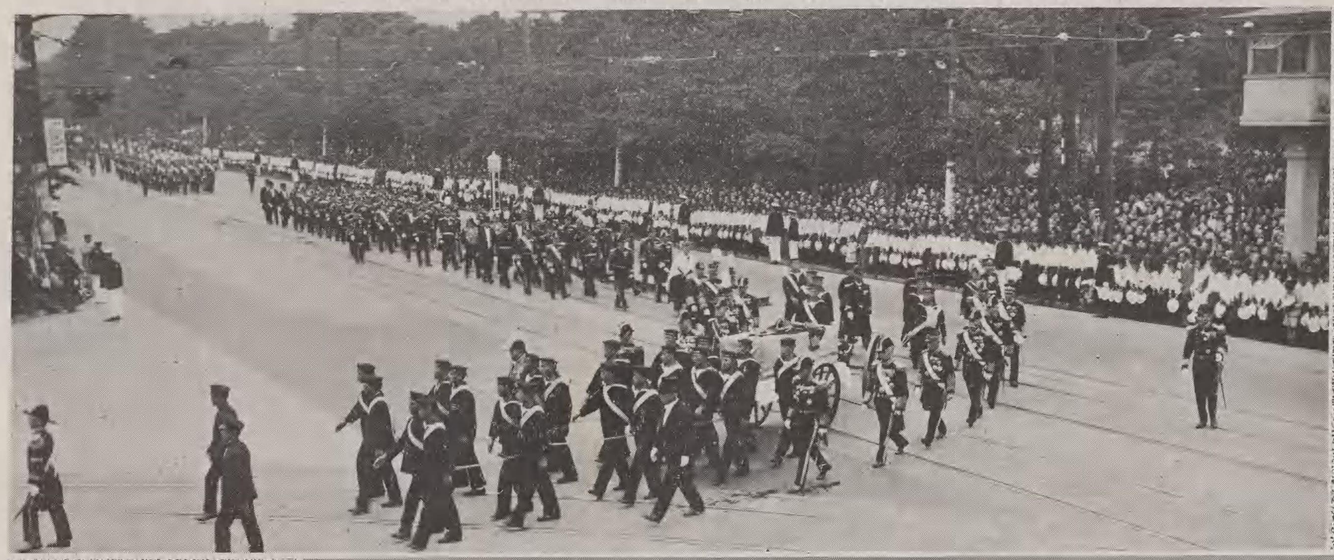
靈柩東郷邸を出づ（國葬當日）

（日四月六年九和昭）儀の諫賜



靈柩日比谷

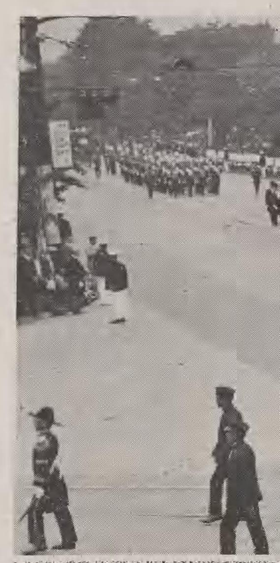
葬列九段靖國神社横を過ぐ（國葬當日）



葬列濠端を過ぐ（國葬當日）

元帥刀及び勳章捧持(國葬當日)

靈柩日比谷正門に入る(國葬當日)



靈柩日比谷葬場に著く（國葬當日）

閑院宮殿下御參列（國葬當日）

伏見宮兩殿下御參列（國葬當日）

閣僚顯官參列（國葬當日）

（日當緬國）着に場葬谷比日柩靈

（日當緬國）族遺く赴に場齋

（日當葬國）る集兵仗儀國各

日比谷齋場の參列者拜禮（國葬當日）

日比谷齋場前場（國葬當日）立てはる喪主彪氏

日比谷齋場の一般參拜者（國葬當日）

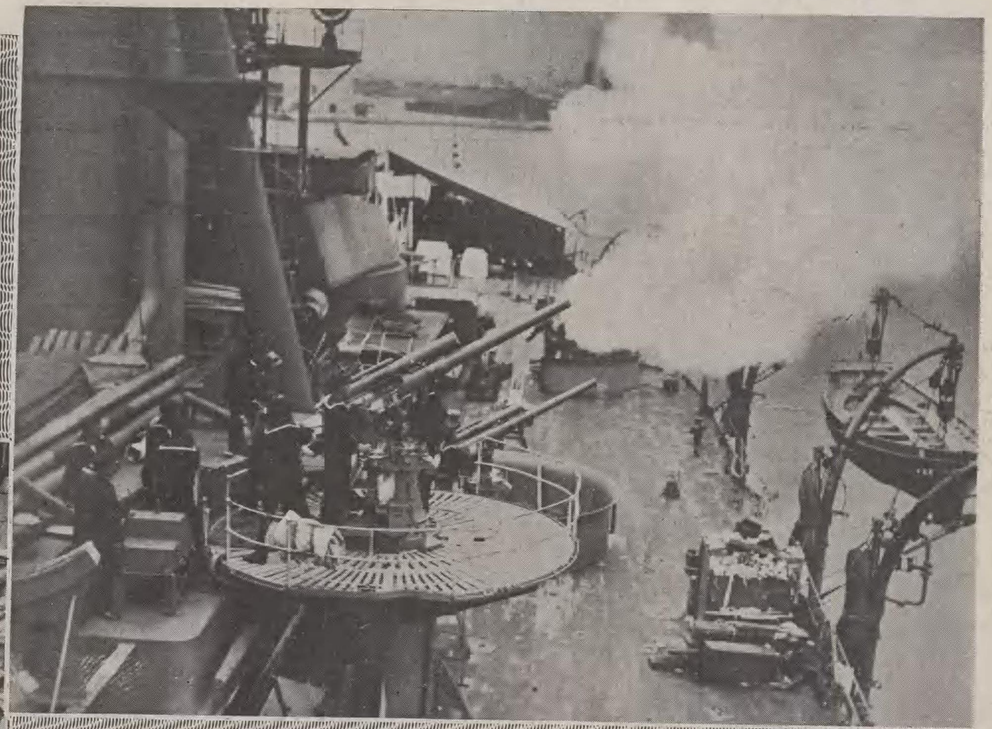
（日當葬國）兵仗儀軍海利太伊

（日當葬國）る集兵仗儀國各

（日當葬

沿道の送葬（國葬當日）

軍艦の弔砲（國葬當日）



海洋少年團送葬（國葬當日）

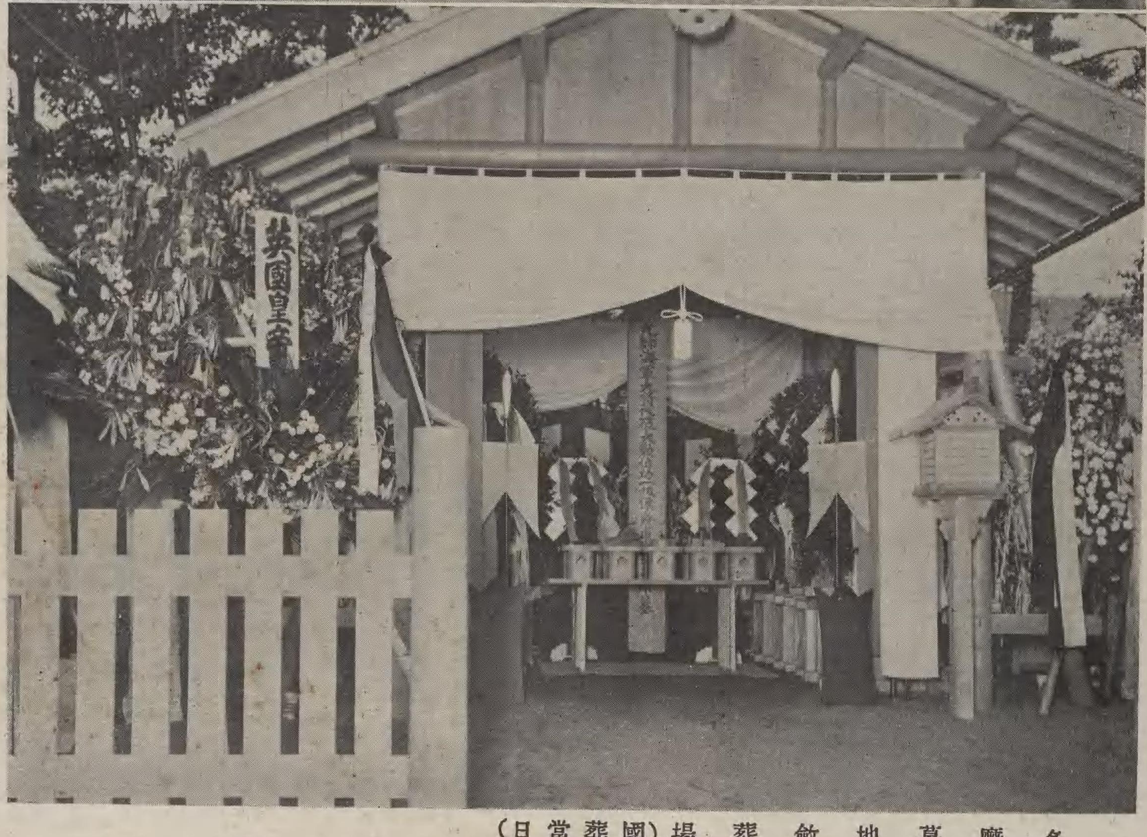
女學生の送葬（國葬當日）

（日當葬國）葬送の道沿

日當葬國）雜踏の葬送谷比

國葬當日）

靈柩多磨墓地に入る（國葬當日）



多磨墓地斂葬場（國葬當日）

元帥東郷平八郎

元帥東郷平八郎

誕生

日本の東郷、世界の東郷、東郷平八郎の誕生は、弘化四年十二月二十二日である。鹿兒島甲突川の河畔、加治屋町、東郷吉左衛門の邸の八疊の納戸に呱々の聲を揚げた孩兒が、後來、我邦未曾有の偉大な海將となり、全世界から敬慕される英雄となつたのである。

加治屋町は、往時、上下に分れ、東郷の邸は下加治屋町に屬してゐた。この地、當時は僅かに七十餘戸の武家屋敷であつたが、幕末から明治大正へかけての偉人が輩出してゐる。西郷隆盛、大久保利通、大山巖、西郷從道、村田新八、黑木爲楨、而して東郷平八郎等、皆之れ青史に載る人物ばかりである。

加治屋町の東郷邸は、面積三百坪許りの方形の地に、四方を竹垣で圍み、門は北面し、家屋の棟は東西に延びて、八疊三室、六疊四室、四疊二室、二疊二室に、納戸、物置、臺所、土間等があつた。平八郎誕生の室は、此内の納戸である。(此東郷邸は、明治十年の兵燹に燒けて、今は女學校の敷地となつてゐる。)

父東郷吉左衛門は諱を實友といひ、文化二年八月十六日に生れ、文武の道に秀で、天保十年、郡奉行見習となり、在職九年、其治績の見るべきものがあり、進んで郡奉行となり、更に高奉行、御納戸奉行にも進んだほどの人物であつた。

母益子は、同藩堀與三右衛門の三女で、文化九年十月五日に生れ、白梅の花にも譬へられた位に、美しい姿なるのみならず賢こき香りの之れに添ふて薩摩に咲く花一枝ともいふべき女性であつた。夫婦の中に五男と一女とある。其四男こそは、世界的偉人として英名を萬代に輝かす元帥東郷平八郎其人であつた。

東郷元帥は、初め仲五郎、元服して平八郎と改め、名を實良といふた。

(日當葬國)場葬斂地墓磨多

少年時代

年少時代の元帥は、白皙朱唇のヨカチゴであつた。後年のどつしりした落付きのあるあの姿を見て直ちに其年少時代を想像すると、思ひもつかぬものになる。美しき母の血をうけただけに生來の美少年であつた。唯、あの炯々たる眼光は年少時代から備つてゐて、天晴れ物の役にたつべき象徴の如く見られた。父吉左衛門は謹直な薩摩武士、母益子は婦徳圓滿の佳人であるから、此間に養育せられた元帥は、可なり家庭に惠まれた人でもあつた。

殊に慈母の心づかひは並々ならぬものがあつて、至つて微細の點に迄心を配つてゐた。例うれば愛兒の枕もとを通過するが如き事は避けて、必らず足許の方へと迂回してゐた。其意は、此兒をして將來御國の役に立つものとするには、其臥てゐる頭上を足で踏むが如きは避けねばならぬ。親と雖も輕しく子供を取扱つては、其兒をして長じて忠臣義士にならしめぬ因となると。かやうに迄して微い箇所に心を勞してゐたのであるから、之れを傳へ聞いた近隣の人々は、其兒童教育に周到なる用意を持つ事を感心してゐた。

元帥の八歳頃の日課を聞くと、毎朝未明に起きて、六ツ頃（午前六時）より、脛もあらはに短い袴をつけて、近くの西郷吉次郎方に赴いて習字を一時間程稽古する。此西郷吉次郎は隆盛の次弟で、越後長岡の戰さに戰死した人である。五ツ頃（午前八時）に家へ歸り、母から髪を結つて貰つて、朝飯を食べ終ると、日々順番になつてゐる友達の家に行つて、聲高らかに四書などの素讀をしたものである。之れがすむと、甲突川へ飛び込んで水泳の稽古をする、其ひま〳〵に河原へ出て、友達同志で相撲をとる、此相撲の敵手にはいつも帖佐三次とか伊知地休八とかゞ、いゝ相手であつた。前者は後の陸軍大將黒木爲楨、後者は海軍大佐伊知地弘一であつた。

水泳や、相撲で散々暴れ廻つた後、八ツ頃（午後二時）家に歸つて晝飯を食べ、夫れから瀋の演武館へ行つて、師範役藥丸半左衛門の指導の下に、示現流の劍法を教へて貰ふ。時には棒切を振り廻はして、樹木に向つて斫り込みの稽古をする。夜になれば、又友達の家に集つて、軍書や傳記の講讀をしあひして、互に慰み、且奮うた。斯の如く忠孝武勇、義烈禮節の氣を養うて、日本精神の涵養につとめたから、今日の少年の言行や覺悟とは格段の差違あるものがあつた。

元帥の十歳の時、卽ち安政三年の七月十五日、盂蘭盆のために日課は休みであつたから、少年仲五郎は唯ひとり、ブラリと遊びに出て、附近を散歩してゐる內に、田甫を流るゝ小川のほとりへ出た。不圖見ると、水の中には多くの小鮒が川上へ登つて行くのが目についた。何と思つたか、衣服の裳をまくしあげて、水際に立ち、小刀を拔いて水の中の鮒をめがけて斫りつけた。小腕ながら相當な冴え

館へ行つて、師範役藥丸半左衞門の指導の下に、示現流の劍法を教へて貰ふ。時には棒切を振り廻はして、樹木に向つて斫り込みの稽古をする。夜になれば、又友達の家に集つて、軍書や傳記の講讀をしあひして、互に慰み、且奮うた。斯の如く忠孝武勇、義烈禮節の氣を養うて、日本精神の涵養につとめたから、今日の少年の言行や覺悟とは格段の差違あるものがあつた。

元帥の十歳の時、卽ち安政三年の七月十五日、盂蘭盆のために日課は休みであつたから、少年仲五郎は唯ひとり、ブラリと遊びに出て、附近を散歩してゐる內に、田甫を流るゝ小川のほとりへ出た。不圖見ると、水の中には多くの小鮒が川上へ登つて行くのが目についた。何と思つたか、衣服の裳をまくしあげて、水際に立ち、小刀を拔いて水の中の鮒をめがけて斫りつけた。小腕ながら相當な冴えを見せ、或は鮒の頭をはね、或は尾を切つて、見る〳〵內に數十尾の鮒を斫り斃した。其頃から東鄕の四男坊はなか〳〵やりをるとの噂さがちらほら聞え出した。

鹿兒島では、當時、金錢を數へるに、一枚、二枚、三枚といふのが慣はしであつた。ある時、長兄四郎兵衞が、仲五郎少年の傍を通ると、一枚二枚とつぶやいてゐたから、武士としては金錢を數へるといふ事が甚だ賤しいとして嫌つてゐた頃であるから、其言葉が、今弟の口から出るのを聞いて、何故、そんな賤しい言葉を發する、少年たりとも武士の子でないか、氣をつけて物を言へと叱りつけた。すると、仲五郎はぬからぬ顏して、兄上、然らば紙を數へるのは、何と申したらよろしいか、お敎へ下さいと云うた。叱つた兄は、此答へができない、何となれば矢張一枚二枚といふからである。

又ある時、戶棚に氷砂糖があつたから、母上、氷砂糖を下さいとせがむと、母親は何心なく、もう在りませんと答へて了うた。仲五郎少年は、得たりや應と、母の不在中に、戶棚の中の氷砂糖を皆食べて了うた。母親は家に歸つて、戶棚をあけて見ると、行きしなには在つた氷砂糖が一つもなくなつてゐる、屹度仲五郎の爲た事であると思ひ、呼びよせてそれを聞き糺すと、先刻尋ねた時に、母上は無いと仰せられた、已に無いものは何時まで經つても有る筈がないぢやありませんか。又無いものが無くなる筈はありませんと答へた。母は自分が嘘をいふたのであるから、深く後悔して、却つて其虛言をいふた事を謝した。此母にして此兒あり、此兒にして此母ありといふべきものである。

負けじ魂の強いこと、剛情我慢の強い事も並々ではなかつた。ある日、厩にはいつて、父の秘藏の栗毛の馬に戲れてゐたが、頑強な此馬は、餘りいたづらを過す小主人公に怒り、いきなり一聲嘶くと共に、前脚をあげて、仲五郎少年を蹴飛ばし、其頭へカブリと噛みついた。流石腕白者も之れには瞻をつぶしたが、氣の勝つた少年であるから、手に持つてゐた棒で、馬を滅茶苦茶に敲き、漸く馬の放すに乘じ隙さず逃げ去つた。翌くる朝、髮を結つて貰ふ時に、母親に馬の齒形を見出されて、叱りつけられた。彼れは腹が立つて耐まらず、又もや厩へ躍り込み、馬の橫面を思ひきりヒツパタイテ、其憤を晴らした。

以上の如きは、東郷元帥の腕白時代の物語であるが、之れを以て其少年時代の全貌と解するは當らない。以上は唯、其腕白が相當強かつたと共に、敏捷機敏の才能と、不屈不撓の精神が、年少より宿してゐた事を示すものに止る。

元帥、昭和四年の海軍記念日に、日比谷公園で擧行した少年東郷會の發會式に當り、次の如き訓話をした。之れこそ少年の好教訓であると共に、元帥の年少時代にも腕白の以外に至誠の修養を不言不識の間に積む事を忘れなかつたを察すべきものがある。

「どんな才氣があつても、又は力があつても、眞心が缺けて居ては、決して本當の御奉公はできないのでありますから、どうぞ正直にして誠の道を踏み違へないやうにお願ひ致します。」

この至誠一貫は少年に取つての好訓であるのみならず、人間全般の好指針でもあるが、元帥の一生涯は又この至誠の現實化を以て終始してゐたものであつた。

萬延元年、元帥は十四歳になつた。父吉左衞門は、藩廳へ出仕せしむる爲に、表面は十五歳といふ事にして、前髪を落して元服せしめ、仲五郎の名を平八郎と改名させ、書役といふ名儀で、藩に務めさす事にした。其任務は、終日机に據りて、何かと書き付ける役目で、一ケ月に玄米三斗俵を一俵其俸給として支給された。東郷平八郎の名が世に出來たのも此時なら、東郷平八郎の公務についたも此時が始まりであつたのである。

其前後から、荻野流といふ砲術を學び、十四歳の少年の腕で、十匁の火縄銃を取つて射撃の稽古をしたり、同じ年頃の少年等と共に、甲突川の河口附近の廣場で、銃を肩にして操練の稽古にいそしんだりしてゐた。

役所務めや、兵隊の稽古の閑ある時には、家族と共に畑へ出て、蔬菜の栽培に働らいてゐたといふから、剛健な身體と共に築きあげられつゝあつたのである。元帥の如き偉大なる人物と雖も、天稟の資ある外に、矢張り身心の修養を一段と磨きをかけすば、完璧を見る事は難いものである。元帥の後來の偉績を仰視する者は、更に東郷家の庭訓と、元帥自身の年少時代からの修養ぶりを洞察して、其因する處の深淵を索むると共に、自他の警策とすべしである。

薩英戰爭

文久二年八月の生麥事件は、幕末の著名な事件であると共に、薩摩の近世史に取つて、極めて重大な事件であつた。而して東郷元帥に取つては、初陣の戰鬪に際會する因緣深きものであつた。

島津久光は、勅使に從ひ、京都より江戸に赴き、遂に幕府をして朝命を奉ぜしめ、文久二年八月二十一日、江戸を出發して西に歸らうとして、東海道の川崎驛を發して、生麥へ來かゝつた。會々、英國人四人（男三人、女一人）、我邦の風習制度を知らぬから、馬を驅らせて、薩摩の行列を横切つて通過しやうとした。薩摩の從士奈良原喜左衞門等其無禮を憤つて、直に一人を斬殺し、二人を負傷せしめた。之れが所謂生麥事件である。

英國代理公使ジョン・ニキールは、幕府に逼つて償金を要求し、別に薩摩に對しては嚴談を持込み遂に東洋艦隊司令長官キューパー指揮の下に、軍艦七隻は、文久三年六月二十七日、鹿兒島灣口にやつて來て、翌二十八日には鹿兒島の海岸を去る凡そ十餘町の海上に列を作つて碇泊した。

其頃は攘夷論の盛んな時でもあり、且七隻の軍艦が威壓的に列んだとなると、氣の強い薩摩隼人は手を拱ねてゐるものでない。斷然交戰すべしといふ決意を以て、砲臺や要害の地を守つて、英艦を一擊に掃はんと待構へた。東郷家でも、父吉左衞門は監軍の役にゐて、山川砲臺につめかけ、長男四郎兵衞、三男壯九郎、四男平八郎は、藩主の本營詰として武裝して赴いた。

平八郎時に十七歳、筒袖のブツサキ羽織、裁上袴、蔦の定紋つけた軍帽を戴き、腰に兩刀、肩に火繩銃、意氣凛々として、勇んで藩主の旗本を護つた。

此戰鬪は、七月二日正午から砲擊が始まつた。前日來の暴風雨のため海上は一面に怒濤相うつすさまじい光景であつた。我砲臺は突然、英國旗艦イユリアラス號めがけて砲擊を開始した。英艦は不意を食つて、一隻の軍艦の如きは其碇を引揚げる暇がなくて、纜に鐵鎖を切斷して行動したといふ有樣であつたから、英艦も相當に働いたけれど、遂に捷つ事を得ずして退却した。薩藩の損害もあるが、英國軍艦も可なり痛手を負はされた。

本營を護る平八郎は、初め二の丸に居り、後には南泉院側に移つて萬一を備へてゐた。平八郎自身は戰鬪の眞中に馳驅しなかつたけれど、目のあたり砲彈の落下する壯烈の光景を見ては、年少の軍人

の意氣は非常に昂がるものがあつた。兎に角偉大なる海將東鄕元帥は、此際に兵火の洗禮を受けたので、其生涯の歷史上に、先づ出征の一頁を書きつける事となつたのである。

此薩英戰爭の當時に、元帥の母堂益子は其時三十七歲であつたが、我子三人までが出陣してゐるのであるから、陣中見舞に汁鍋を作つて、愛兒の下に屆けやうと、下僕長次を連れて出かけた。何しろ前日來の暴風雨まだ收まらぬ時とて、篠つく雨に風さへ猛つて面を向くべくもない暴れ日であつた。長次に摺鉢を持たせ、自分は大鍋を提げて、暴れ狂ふ風雨の中を陣所めぐりをした。先づ我主力砲臺である辨天砲臺の方面に愛兒を探し廻つたが、英艦から放射する砲彈は物恐ろしき響きをたてゝ飛んで來る、下僕の長次は、砲彈の飛ぶのに恐れをなして、砲聲一發の每に、携へた摺鉢を頭上に被つて首をすくめる、おさまると頭上から取り除く、又砲聲がすると周章てゝ被る其態を見て、益子は、女の身でさへ平氣でゐるのに、男のお前が其樣は何事である、恥かしいと思はぬかとたしなめた。漸くにして南泉院に愛兒がゐると知り、汁鍋をこゝに屆けて家に歸つた。歸り路は已に夜に入つてゐたけれど、敵の砲擊のために人家が燒けて、火焰白晝の如く照らし、步行に却つて便なものがあつた。之れは後來母堂益子の某氏に語つた實話であるが、東鄕家の三兒の出征と、其母堂の兒を想ふ情の熱きを知ると共に、別に男子も及ばぬシツカリした精神を持つ人であつた事がわかつて、元帥の母堂の女丈夫であつた事を證明する一話柄である。

阿波沖の海戰

英國艦隊の鹿兒島襲擊は我邦上下に衝動を與へたは勿論の事であるが、わけて當の薩摩藩に取つては好試練でもあり、好刺戟でもあつた。之れによりて頑固一方の攘夷論ではいけない、邦を護るには然るべき海軍を用意して置くが急務である事を、明確に且正確に悟り得たのである。こゝに於て元治元年、新銳の陸海軍を養成する要を感じて、開成所を設けた。慶應二年、開成所を海軍局と改めたが元帥の父吉左衞門は由來熱心な海軍奬勵論者であるから、其子壯九郎、平八郎、四郎左衞門を海軍局に入れた。

慶應三年、西鄕吉之助、小松帶刀、薩兵を率ゐて上洛する時、平八郎も其隨員に加へられ、海兵隊の第一遊擊として上洛し、乾御門の警固の任に當つた、時に二十歲であつた。其歲の十一月二十日父吉左衞門が永眠したとの悲報を受取つたが、何分時節柄であり、禁裡警衞の任にゐるから、永らく喪に服する事もならず、僅か十數日間の休暇の上、引つゞいて警固の任についてゐた。

當時の天下の形勢は頗る急迫したものがあつて、德川幕府の勢威は全く墜ち、十四代將軍家茂は大

元館の久吉左衞門は由來熱心な海軍奬勵論者であるから、其子壯九郎、平八郎、四郎左衞門を海軍局に入れた。

慶應三年、西鄕吉之助、小松帶刀、薩兵を率ゐて上洛する時、平八郎も其隨員に加へられ、海兵隊の第一遊擊として上洛し、乾御門の警固の任に當つた、時に二十歲であつた。其歲の十一月二十日父吉左衞門が永眠したとの悲報を受取つたが、何分時節柄であり、禁裡警衞の任にゐるから、永らく喪に服する事もならず、僅か十數日間の休暇の上、引つゞいて警固の任についてゐた。

當時の天下の形勢は頗る急迫したものがあつて、德川幕府の勢威は全く墜ち、十四代將軍家茂は大阪城に於て他界し、十五代將軍慶喜は、時勢の推移を察して、遂に大政奉還して、征夷大將軍をも拜辭して了うた。畢竟之れは薩摩と長州との聯盟が成立して、勤王倒幕の大運動が活潑に働きかけたからであつた。

慶應三年十二月、江戸三田の薩摩邸を、幕府側の庄內、松山、上の山其他の藩兵で燒打をした。薩邸內に潛伏した浪士達は、戰ひながら退き、品川沖に碇泊してゐた薩摩の汽船翔鳳丸に乘つて遁げ出した、之れを幕府側の軍艦回天が追擊したが、轟沈する事も拿捕する事もできなくて、翔鳳は兵庫へと逃げて來た。

兵庫に碇泊してゐた薩摩の軍艦春日は、幕艦が已に戰鬪行爲に出たからは、我方にても其用意が必要だと考へ、西鄕隆盛も亦一戰を免がれぬものと察して、明治元年一月、第一遊擊隊長赤塚源六を春日艦長に任命し、海軍の俊秀青年を選んで其乘員とした。東鄕平八郎も其選拔された一人であつた。

此一行は一月二日の夜伏見から船で大阪に下り、三日薩邸に着き、そこから又もや船に乘つて安治川を下り、海路兵庫に着いて春日艦に搭乘した。春日は軍艦といふけれど、木製の外車汽船で千十五噸、長さ四十一間、幅四間五尺、馬力三百といふものであつた。赤塚艦長が來る迄に、春日は兵庫に碇泊してゐた薩摩の軍艦と談判を始めてゐた。それは薩摩の汽船平運丸が、兵庫で幕艦から砲擊せられた爲で、幕府の艦隊司令官榎本釜次郎は、江戸で貴藩と幕府方とが開戰してゐる以上、已に敵と見做すべき艦船を此港から出港せしむる事はできないと、明かに戰鬪の意志ある處を示したから、春日艦でも之れに應ずるの準備をしてゐたのである。

赤塚艦長は、今や京都方面に於ても官幕は開戰してゐる。我艦は翔鳳丸を護衞して、明四日兵庫を出るが、敵が封鎖してゐるならそれをブチ破つて出やう、平運丸は其隙に自力で瀨戸內海を通つて鹿兒島へ歸れと、命令を下し、直に春日の艦內の配置を定めた。東鄕平八郎は三番司令官として左舷四十斤旋條砲を掌つたのである。

幕府側の軍艦は、開陽を旗艦として、蟠龍、翔鶴を左右に從へ、順動、富士を備へて薩艦が出港せんとしたなら一擊して沈めんと待ち構へてゐた。中にも開陽は和蘭で新造した當時としては精銳の軍

艦であつた。

然るに三日の夜、大阪方面に於て盛んに火の手があがつた、之れは伏見鳥羽の戰さに幕軍が敗北して、大阪にゐた幕府側が動搖した結果で。榎本釜次郎は之れを見るや、春日艦よりも大阪の方が大事であるから、俄に出帆を命じ、急いで天保山沖へと回航した。之れがため兵庫の封鎖は解けて、春日艦は無難に汽船を護つて出港する事ができた。

往き〳〵て阿波沖へさしかゝると、最早夜も明け放つたが、遙か兵庫の方から黑煙を吐いてやつて來る巨艦がある、よく見ると幕艦開陽である。

玆に於て春日艦は戰闘の準備をなし、開陽の近づき來るや、愈々砲火は交へられた。阿波海上、硝煙閉ざし、砲彈うなりを生じて飛び交ふ、之れが明治初年の阿波沖の海戰である。

春日は大小三十八彈を發射したが、其內命中したのは、東鄕平八郎の放つた一彈と、他の二彈で。開陽は百發近く放つたが一發だけ春日を掠めたゞけで、兩艦ともさしたる損傷はなかつた。其內、春日の速力が開陽より勝れてゐたため、開陽は有力な兵器があるけれど、速力の點でどうにもならず、双方勝負なしの引分けといふ姿で、開陽は兵庫へ還り、春日は鹿兒島へ向けて引きあげた。東鄕元帥の海上に於ける實戰の初戰は、實に此戰闘であつた。

宮古及び函館の海戰

明治維新の戰爭は、伏見鳥羽に始まり、江戸東叡山、日光今市、白河口、越後長岡、會津若松、出羽庄內と進み、遂に北海道函館の榎本釜次郎等の降伏で段落となつたのである。薩艦春日が阿波沖において海戰したのは、其第一番の伏見鳥羽の戰ひの頃であつた。それから春日は艦隊修理のため上海に四ケ月程在つたが、越後筋の敵軍がなか〳〵猖獗であり、若松城攻擊も始まつたといふので、鹿兒島から越後出羽方面の海上を遊弋して、官軍の輸送や海上の警衞に當つてゐた。若松城陷ち、庄內も降參したから、一度鹿兒島に歸つたが、又もや函館方面が騷がしいために、此方面の征討に從事するやうになつた。

函館の戰爭は幕軍掉尾の一戰で、初め榎本釜次郎等は、明治元年八月、幕府の軍艦八隻を率ゐて北に走り、函館を襲ひ、五稜廓を陷れ、こゝを其本據として、官軍に抗し、あはよくば幕府回業の目的を達せんとし、せめては德川氏の連枝を擁立して、蝦夷の地を以て獨立の基礎とせんと志した一擧である。今迄の戰闘は皆陸戰であつたけれど、今度は、總將榎本が已に海將である上に、當時の海軍の權威者が其黨に澤山ゐたから、函館の戰爭には相當激しい海戰があつた。

參したから、一度鹿兒島に歸つたが、又もや函館方面が騒がしいために、此方面の征討に從事するやうになつた。

函館の戰爭は幕軍掉尾の一戰で、初め榎本釜次郎等は、明治元年八月、幕府の軍艦八隻を率ゐて北に走り、函館を襲ひ、五稜廓を陷れ、こゝを其本據として、官軍に抗し、あはよくば幕府回業の目的を達せんとし、せめては德川氏の連枝を擁立して、蝦夷の地を以て獨立の基礎とせんと志した一擧である。今迄の戰鬪は皆陸戰であつたけれど、今度は、總將榎本が已に海將である上に、當時の海軍の權威者が其黨に澤山ゐたから、函館の戰爭には相當激しい海戰があつた。

例うれば明治二年三月二十五日の南部宮古の海戰の如きがそれで、其頃日本には裝甲艦としては新著の甲鐵が一隻あるのみであつた。此甲鐵は唯一の裝甲軍艦である上に、具備砲其他も極めて新式であつたから、此一隻を我手に入れるか否かは、敵味方に取つて餘程重大な勢力上の影響があるのである。されば榎本等は最初から、甲鐵を我有に歸せんとして其機會を覗つてゐたが、到頭機會を逸して了つて、新式偉力の軍艦は官軍の物となつて了つた。

こゝに於て之れを奪はんとの計畫を樹てたのが宮古海戰である。此宮古襲擊は幕艦回天の艦長甲賀源吾の手で敢行され、司令官は荒井郁之助であつた。最初の計畫は、蟠龍、高雄の二艦を以て甲鐵を奪はしめ、回天は他の官艦に當つて、之れが救援を遮る手筈であつたのを、暴風雨に出遭つて三艦分れ〳〵になり、遂に回天一隻で、宮古港にゐる官軍の軍艦八隻に當り、甲鐵を拿捕しやうといふ大膽な手段を取つたのである。此折、回天は米國の旗を揭げて官軍の艦隊を欺き、油斷に乘じて甲鐵に乘りかけ、其甲板上に突擊隊を躍り込まさしたが、豫期に反して甲鐵には新鋭の速射砲があつて、之れに薙ぎ倒され、更に他の七艦からの包圍攻擊をうけて、艦長甲賀源吾は壯烈な戰死を遂げ、其目的を達せずして後退したのである。

宮古海戰には、東鄕元帥は春日の三等士官として、備砲を指揮して暴れ狂ふ回天と戰つた。又、元帥は久しき後まで、當時の甲賀源吾の勇戰を稱へて、賊ながら天晴れの勇士であつたと語つてゐた。

宮古海戰の外に五月十一日、函館灣内の幕艦蟠龍の勇戰も目ざましいものであつた。蟠龍の艦長は松岡磐吉、之れ亦一箇の勇將であつた。孤艦を以て官軍の數艦と戰ひ、官艦朝陽を擊沈した。此海戰にも春日は參加した。其外に敵の砲臺を砲擊し、陸上の敵軍を掃蕩し、春日は可なり働いたものである、七日の函館攻擊に際しては、砲臺援護の下に在る回天、蟠龍を相手にして戰ひ、彈丸を發する百七十餘發、我艦に敵彈を蒙る十八ケ所といふ猛戰ぶりを示した。

斯て官軍は海陸から競ひ擊ちて、遂に敵軍を壓迫し、降伏の餘儀なきに到らしめて、めでたく凱旋した。

英國留學時代

函館の戰爭終つて、東鄉平八郎は鹿兒島へ還つた。さうして名義は三等士官であつたが、春日から退艦して全くの書生々活に還元した。間もなく藩侯から東京遊學を命ぜられ、明治二年秋、橫濱へ來て英語の勉强をし、翌三年、東京へ出て、當時英學の大家箕作秋坪の塾に入り、少年と交りて英語を學んだ。

明治三年、兵部省は、英國海軍大尉ホースを聘して、橫濱に碇泊する龍驤艦に、海軍の志ある有爲の靑年を集めて、砲術其他の敎育訓練をうけさす事にした。東鄉平八郎も亦選に當り、同年十二月十一日、龍驤の見習士官を仰付られ、月俸十四圓下賜の辭令をうけた。今迄は薩摩藩の士官であつたのが、之れよりは帝國海軍の士官となつたわけである。四年二月、海軍兵學寮生徒及び各艦乘組の中から成績のよい者を選拔して、英米へ留學せしむるの事があつた。東鄉平八郎亦其選に當り、海軍の本場所なる英國で修行する事となつた。其英國へ着いたは實に二十五歲の折で、初め高僧ボリネーの經營してゐるポーツマスの學校に入り、歷史、數學、圖畵等を一通り學んだ後に、ウースターといふ練習船の乘組員となつた。練習船は商船學校のやうなもので、練習生の優等なる者は、少尉候補生として採用される定めになつてゐた。

ウースター乘組中、砲術研究の爲に、屢々軍艦ヴヰクトリーに赴いたが、ヴヰクトリーは有名な英國海將ネルソンが、トラファルガルの海戰に、偉大な勝利を得た折の旗艦であり、英傑ネルソンの鮮血がにじむ英國最名譽の軍艦である。今は砲術練習艦として、海軍の勇士を養成する場所となつてゐた。

前後二年間、ウースター號で、諸種の修練を經た東鄉平八郎は、ハンプシヤアといふ帆船に乘つて明治八年二月、テームス河口を出でて、遠く英領濠洲メルボルンに向け遠洋航海の途に上つた。三月二十三日赤道を越え、四月十九日喜望岬を通過し、五月十四日メルボルンに著いた、居る事二ケ月、七月十一日メルボルンを發し、東に航して、八月十一日南亞米利加の南端を過ぎ、九月下旬テームス河口へと無事歸つた。航程三萬海里、日を經る事七ケ月、靑年士官の修得する所は頗る大なるものがあつた。

其以前に、帝國政府は軍艦三隻の建造を英國へ註文してゐたのが、漸くに出來上ることゝなつた。扶桑(三七一七噸)、金剛(二二二四八噸)、比叡(同上)が之れである。明治九年四月、在英の海軍留學生等に、新造軍艦の成就する迄滯英せよとの命令が來たから、東鄉平八郎は主として扶桑建造の監視に

七月十一日メルボルンを發し、東に航して、八月十一日南亞米利加の南端を過ぎ、九月下旬テームス河口へと無事歸つた。航程三萬海里、日を經る事七ケ月、青年士官の修得する所は頗る大なるものがあつた。

其以前に、帝國政府は軍艦三隻の建造を英國へ註文してゐたのが、漸くに出來上ることゝなつた。扶桑（三七一七噸）、金剛（二二四八噸）、比叡（同上）が之れである。明治九年四月、在英の海軍留學生等に、新造軍艦の成就する迄滯英せよとの命令が來たから、東鄕平八郎は主として扶桑建造の監視に就いた。同十一年三艦は遂にでき上つた。東鄕は比叡の乘組に命ぜられ、三月二十三日英國を出發して同航の途に上り、五月二十三日橫濱に入港し、之れで靑年士官東鄕も久方ぶりに日本の土を踏むやうになつたのである。

此英國留學時代の間に、日本に於ては元帥の故鄕鹿兒島に西南戰爭の勃發するものがあつた。西鄕隆盛は之れ東鄕家とは同じ地に生れた人物、殊に靑年平八郎を始め東鄕家の者は崇敬してゐた人物であつたから、其爲に私學校黨の擧兵には勿論加はつて、長兄四郎兵衞は負傷、中兄壯九郎は明治十年九月二十四日の城山陷落の際、南洲翁に殉じて戰死を遂げた。若し此時、英國に在らずして故國にあつたなら、元帥の運命もどうなつてゐたか豫め察知し難きものがあつたに違ひない。傳ふる所には、在英の元帥の許へ、我一族が私學校黨に加つた事や、遂には二兄の死傷の報が達した時、元帥は、西鄕先生の爲なら我一族の此處に至つたも道理である、若し自分が薩摩にゐたなら乾度同じ轍を踏んでゐるであらう。併し二兄を始め一族の者が朝廷に反抗したといふ事は誠に申譯がない事である、此上は自分なりとも海軍の技を修めて、將來皇國の爲に必死の働きをなして、其家兄及び一族の罪を償ひ皇恩の萬分の一をも報ひ奉らねばならぬと、堅く決意する處があつたといふ。

比叡、扶桑、迅鯨艦時代

見習士官東鄕平八郎は、歸朝すると共に、同年七月三日海軍中尉に任ぜられ、比叡の乘組將校となつた。久しく海外に在つたゝめ、我海軍の號令を知らないから、自分の思ふ儘の號令をかけてゐた。同僚から其號令のかけやうが違式だと注意されると、負けじ魂の強い東鄕中尉は、上官が部下に發すれば卽ち命令だ、之れを違背する者は斬り捨てるばかりだと云ひ切つて少しも屈せぬ。

八月十五日、比叡から扶桑へ轉補せられた。扶桑は當時我國の唯一の戰艦であるから、乘組の將校も粒選りの秀才揃ひであつた。外の士官達は英國仕込みの東鄕中尉の鼻柱をひし曲げんとて、色々と難役を持ち込むが、剛情我慢の東鄕中尉は少しもひるまず、英國流と我流とをつきまぜて、臨機應變

にやつてのけたから、流石の秀才揃ひの他の將校も東鄕の負けじ魂の強いのに呆れ、遂には向ふから折れて出るやうになつた。

後に海軍大臣になつた山本權兵衞は此時海軍少尉として同じ扶桑に在つた。此人は常にイタヅラモノの首領であるから、東鄕中尉を何とかしてヘコマカしてくれんと、或る時、梯索の昇降競爭を申込んだ。權兵衞少尉の敏捷ときては到底比敵するものがない、一、二、三の合圖と共に、兩者、兩舷から昇り始めたが、勿論精悍機敏の權兵衞少尉は猿の如く素早く昇りついた、東鄕中尉は中途でズボンが破れて、其爲に行動の自由を缺き、まだ中途に降りかけてゐる時に、權兵衞少尉はもう降り立つて了つてゐた。勝ち誇つた少尉は、東鄕中尉の肩をたゝいて我勝利を示すと。中尉は曰く、負けたのぢやない、ズボンが破れたからだと主張して、頑として其敗を否認した。

同年十二月二十七日、海軍大尉に任ぜられ、翌年十二月二十七日、海軍少佐に進み、迅鯨艦の副長に補せられた。迅鯨艦副長時代の元帥の精勵ぶりといふものは人目を驚かしめるものがあつた。毎朝必らず衆に先んじて起き、夜は衆におくれて臥床し、艦内の事務は細大漏さず處理して、爲に全艦の士氣を緊張せしむるものがあつた。

要するに之れは東鄕副長の誠意の發露に外ならない、みせかけや、方便の精勵でないから、目の見えぬ所まで其誠意は配ばられて、傍の者をおのづから感化せずには置かぬ。此事は迅鯨副長時代のみでない、元帥一生涯を通じて終始一貫のものであるが、迅鯨時代の逸話として殘つてゐるものが多々ある。

嚴寒の朝の甲板掃除は、海に馴れた者でも可なり應えるものである。東鄕副長は自らズボンをからげ、素跣足となつて、甲板上を流す水の中に立つて監督してゐた。奇寒足の指を凍らして一種の苦痛を感ずるが、一日として怠る所がなかつた。又、晩秋の暴風雨の夜、甲板掛の士官が職務上、雨風はげしい甲板の上を巡視してゐると、上甲板に怪物の如き服裝した者が佇立してゐる、此風雨の夜に何者かと誰何すると、東鄕副長であつた。併も二回ほど巡視したが、其都度にやはり毅然として立つ副長の姿を見て、全く感服して了つた。

羅馬は一日にして建つものでない、東鄕元帥のあの威望、德望、殆んど神人の如きものは、永らくの間の不斷の誠心の發露が築きあげたものである。多くの人は、一時の亢奮によつて他人の企て及ばぬものをなす事もあるが、忽ちにして中斷されて了ふ。東鄕元帥のは不斷不撓の繼續であつて、其一つ宛を分解しても、やはり常人以上の確實堅牢さがあつた。世の東鄕元帥を崇慕する人々、此美點、此特點を見倣うて、之れを實行につとめねば、其崇慕や單なる輕薄者流となる、よく心して東鄕元帥の言行を見て、自ら省る處があつてほしいものである。

羅馬は一日にして建つものでない、東郷元帥のあの威望、德望、殆んど神人の如きものは、永らくの間の不斷の誠心の發露が築きあげたものである。多くの人は、一時の亢奮によつて他人の企て及ばぬものをなす事もあるが、忽ちにして中斷されて了ふ。東郷元帥のは不斷不撓の繼續であつて、其一つ宛を分解しても、やはり常人以上の確實堅牢さがあつた。世の東郷元帥を崇慕する人々、此美點、此特點を見做うて、之れを實行につとめねば、其崇慕や單なる輕薄者流となる、よく心して東郷元帥の言行を見て、自ら省る處があつてほしいものである。

東郷少佐の結婚

明治十四年二月、東郷少佐は鹿兒島藩士海江田信義の長女てつ子と結婚した、少佐は二十五歳、花嫁は二十一歳であつた。海江田信義は、幕末天下多端の砌、西郷隆盛、大久保利通等と勤王攘夷の運動をして、國事に盡瘁した人物である。櫻田事變の有村治左衞門は其弟であつた。曾つて戊辰の役に東海道征討總督參謀となり、江戸城引渡しの折には西郷隆盛と共に其收受の任務に盡くした。明治二十年華族に列し子爵を授けられた、維新創業の功臣の一人であつた。てつ子は其庭訓を受けて、資性謙讓に富み、淑德の譽れ高き女性であつたから、永く元帥に添うて內助の功があつた。嫁いだ頃の東郷家は財政が樂でなかつたから、姑益子と共に心を勞して、夫君に知らしめずに燐寸箱の內職をして節儉身を持し、夫君の公務に傍目も觸らず務めるに際して、安んじて家政の事を顧みる要なき迄に爲し遂げてゐた。殊に其結婚の年に、てつ子夫人は積極的に金策して、麴町區上六番町七番地に三百坪の地面を家屋付のまゝ買ひ取り、後にまた三百坪を買ひ足して六百坪として、日露戰役後、其建增しを行うたので、あの有名なる東郷邸を爲したもので、之れ皆てつ子夫人の內助の力の發現であつた。

朝鮮壬午事變

明治十四年十二月二十七日、東郷少佐は天城艦副長に轉じた。翌十五年七月、朝鮮京城に於て暴徒勃發して、我士官及び留學生を殺し、公使館を襲ひ、花房公使は難を避けて仁川に走り、英艦に便乘して長崎に還つた。我政府之れによつて、陸軍少將高島鞆之助に陸兵二中隊を率ゐせしめ、花房公使を護つて朝鮮に赴かしめて、且つ政府に嚴重な談判を行はしむる事となつた。我海軍では、海軍少將仁禮景範を司令官とし、金剛、日進、清輝、比叡、迅鯨、孟春、磐城、天城の諸艦を從へて、一行を護る事とした。天城の副長東郷少佐固より之れに從うた。

京城に着いた花房公使は、直に朝鮮政府に談判した處、茫だ要領を得ない。止むを得ずこゝに戰端を開かねばならぬ次第に及んだが、仁川港内にゐた清國軍艦は、朝鮮の危機迫れりと見て、窃に南洋灣から上陸して、巧みに大院君を誘うて清國軍艦に乘せて天津へ引揚げて了つた。頑固黨の旗頭である大院君を引きぬかれたために、朝鮮政府は急に折れて出て、日本の要求に應ずる事となり、濟物浦條約を結んで、此事件は漸く終結を告げた。

東郷少佐の副長たる天城艦は、此際、南洋灣の視察を命ぜられたが、始めての航路であるから、誰も水路を知る者がなかつた。不案内の水路へ無暗に軍艦を入れると、今迄の經驗上坐礁の虞れが十分にあるから、流石の東郷少佐も爲すべきやうもなく困つた。そこで何食はぬ振をして、灣口に假泊して時を待つてゐると、一隻の清國軍艦が勝手知つたる事とて悠々灣外へ出て行つた、其水路をばよく見届けて置いて、天城を其通りに航行さしたら、果して首尾よく視察する事ができた。

天城はそれから仁川方面の警備につき、其間に大同江を溯行して平壤付近に迄行つた、此視察調査は後に二十七八年の役に大きな役に立つものとなつた。又清國の袁世凱が其當時京城に在つて例の怪腕を振はうとしてゐた。東郷少佐は陸軍の某士官に導かれて、袁世凱と逢つた。袁世凱は大に世界の大勢や東洋の形勢などを論じて、更に日支親善について滔々辯舌を振つたが、之れを通譯が通譯して聞かすと、今迄默々として袁世凱の顏面を凝視してゐた東郷少佐は、唯一言、解らんといつたきりで再び口をつぐんで了つた。怪腕縱横の袁世凱も鐵壁にブツツかつた感じがしたに違ひない。

天城艦は明治十六年二月馬關に歸つた。東郷少佐は同月二十四日、命に接して、日進艦に搭乘して横須賀に來ると、第二丁卯艦の艦長に補せられた、之れ元帥の艦長となつた最初で年齒は三十七、此艦は百二十五噸の小艦であつた。

まだ天城の副長として馬關に碇泊中、某國軍艦が入港して來た。其司令官が大佐であつたから、代將旗に對する定數の禮砲をうつと、彼れは大佐であるけれども純然たる司令官であるから、司令官に對する禮砲をうつてくれと交渉して來た。東郷少佐は其粗忽を謝して改めて發砲すると答へたけれど打つに臨んでは、曩きにうつた砲數の不足數だけをうつに止まつた。彼れより之れについて又もや談じ込む。しかし前後合すれば其定數となるでないかとはねつけて取り合はぬ。彼れは之れを以て海軍省へ交渉し、海軍卿から打直せといふて來たが、例の如く前後合はせばそれで定數だといひ張つて、遂に譴責を蒙つた。其頃は、外國人を憚り、其暴慢を看過する惡い風習があつたから、東郷少佐は毅然として之れを拉ぐの勢ひを示したのであつた。

じ込む。しかし前後合すれば其定數となるでないかとはねつけて取り合はぬ。彼れは之れを以て海軍省へ交渉し、海軍卿から打直せといふて來たが、例の如く前後合はせばそれで定數だといひ張つて、遂に譴責を蒙つた。其頃は、外國人を憚り、其暴慢を看過する悪い風習があつたから、東鄉少佐は毅然として之れを拉ぐの勢ひを示したのであつた。

臺灣鷄籠砲臺

第二丁卯艦の艦長時代は、本邦沿岸を測量したり廻航したりしてゐた。明治十七年五月十五日、更に天城艦長に補せられた。天城艦は中艦隊に編入せられて、扶桑と共に上海に向つた、之れは淸國と佛國との間に安南事件といふものが發生して、兩國干戈を交へるが如き形勢になつたから、上海方面の居留民保護の任務を果すためである。

上海に着いた天城は、司令官の命により、單獨錨を拔いて楊子江を溯つて六百餘海里を距つ漢口まで往き、其情況を視察して六月下旬上海に歸つて來た。すると、淸佛は開戰して、福州馬尾で砲火を交へたといふ報があつたから、直ぐに其方面へ航行した。其後は九百二十噸の天城艦一隻で、佛國艦隊の跡を追うてくつゝき、香港、臺灣と、佛國艦隊の行く所へは必らず從うて行つた。殊に同年十月、佛國艦隊が臺灣鷄籠港を占領した時なぞ、占領砲臺の內部を見せて貰ひたいと申出でゝ、之れを諾せしめて、詳に視察を遂げた。

此所に奇因緣がある、其鷄籠砲臺を視る時に、佛國の工兵大尉が一分隊の兵を率ゐて、東鄉艦長二行を叮嚀に案內してくれた。此工兵大尉こそ、後に世界大戰の初め、獨軍は破竹の勢を以て佛軍を追ひまくつた。佛軍の總司令官ジョフル將軍は、敵の兵勢の味方に勝れるものあるを知つて、無理な防禦を試みず、退却に退却を重ねて敵が追擊に逸つて、其ために右翼方面に弱點を生じかけたと見ると、斷然攻擊に轉回して、所謂マルヌの激戰をなして、勝ち誇つた獨軍を挫折せしめた。此名譽あるジョッフル元帥が、我が皇太子殿下の佛國御訪問遊ばされた答禮の使命となつて、日本に來た事がある。大正十一年正月二十日參內して使命を果し、翌二十一日宮中に於て賜餐の榮を受けたが、其際ジョッフル元帥は、三十八年前、佛軍が臺灣鷄籠を占領した時、自分は工兵大尉で、其折觀戰に來た日本海軍將校をば砲臺內に案內したが其折の海軍將校は今も生存して居らるゝや、圖らずも當年を懷ひ出して、何となくしたはしい氣分がすると述懷した。之れを宮相牧野伸顯子が、後に佛國大使館に於ける晩餐會の席上で、不圖東鄉元帥に話すと、元帥は笑を含んで、其海軍將校は自分であつたといふ。ジョッフル元帥之れを傳へ聞いて

大に喜び、元帥の傍に近づいて、共に握手を堅くして、四十年前の昔を互に追懐した事がある。

清國艦隊を觀破す

明治十八年六月二十日、海軍中佐に任ぜられ、同月二十二日、主船局出勤、七月七日、神戸小野濱在勤、新造軍艦の工事監督、翌十九年五月、新艦竣功して大和と命名、其艦長に補せられ、七月十三日、武官々等改正によりて大佐となり、是れより二十三年に至る迄淺間艦長、横須賀鎭守府兵器部長比叡艦長等を歷任したが、此期間は元帥に取つては餘り晴れやかな時代ではなかつた。何となれば明治二十年一月の頃から、病氣に罹る事が多くて、病氣引込とか病氣保養で湯治行とかゞしば〳〵あつた。明治二十年、二十一年、二十二年の官歷を見ると之れを證する。恰も元帥に取つては世間でいふ所謂前厄、本厄、後厄の四十一歲から四十三歲の間であつた。併し元帥は病魔に冒されても晏如としてゐる人物でない、病間の閑多きに臨んで、外交に關する書籍を澤山讀破した。それは艦長となつた以上、國際間に關係ある事項に接する場合が多いから、國際外交の事を豫め頭腦に入れて置かぬと萬一の場合に思はぬ不覺を取り、延いては國家の爲に不利益な事を惹き起すから、專門以外の事では外交の事は蘊蓄して置くべき要があるといふ持說に基づいたものである。此研鑽の爲に後年、仁川沖の高陞號擊沈の場合の如きも果斷一決してあの快擧を斷行し得たのであつた。

元帥の健康は明治二十三年頃からメキ〳〵と恢復し、同年五月十三日、吳鎭守府參謀長に任命された。

當時、淸國の北洋艦隊は、定遠、鎭遠の二堅艦を始め我邦に比しては甚だ優勢なる軍艦を持つてゐた。北洋艦隊の提督丁汝昌は其艦艦を率ゐて、明治二十四年、我橫濱港に來り大に示威をなした。遂に安藝宮島に回航して、吳鎭守府の將校等を招待したが、東鄕大佐も吳鎭守府參謀長として之れに列つた、多くの賓客は定遠鎭遠の雄大さを賞嘆してゐる間に、東鄕參謀長は默々として視察してゐた。數日の後、淸國艦隊は平遠を修理の爲と號して吳軍港に入れたが、東鄕大佐は、平服の儘微行して平遠を細かに視察し、歸つて後曰く、淸國の艦隊は燒身の名刀ぢや、名刀は名刀であるけれど、中身が燒けてナマクラになつてゐる、決して怖るゝに足らぬと評してゐた、それは平遠艦上の不取締なる、士氣の弛廢してゐる事を歷々として觀破したからであつた。

吳鎭守府參謀長は一年半程務めてゐた。明治二十四年十二月十四日、常備艦隊の浪速の艦長となる此浪速艦長時代から、漸くにして元帥の精采は突々として輝くものを生じた。

遠を細かに視察し、歸つて後曰く、清國の艦隊は燒身の名刀ぢや、名刀は名刀であるけれど、中身が燒けてナマクラになつてゐる、決して怖るゝに足らぬと評してゐた、それは平遠艦上の不取締なる、士氣の弛廢してゐる事を歷々として觀破したからであつた。

吳鎭守府參謀長は一年半程務めてゐた。明治二十四年十二月十四日、常備艦隊の浪速の艦長となる此浪速艦長時代から、漸くにして元帥の精采は奕々として輝くものを生じた。

布哇に於ける浪速艦長

明治二十五年（西曆千八百九十二年）布哇に於て突然一大政變が發生して、同島に在留する我居留民二萬數千人の生命財産が危險になつたから、之れを保護するために浪速艦は急遽布哇に赴く事となつた。

布哇は大小八箇の島と數箇の無人島とから成り、土着の住民はポリネシヤ人種である。西曆千七百七十八年、英國航海家キヤプテン・クツクの發見した島で、十九世の初めにカメハメハといふ豪傑が現はれて、全群島を統一して王位に登つた。それから約七八十年間は平和に過して來たが、第八世リリオカラニ女王の代に至り、西曆千八百九十二年、米國移住民の乘ずる所となりて、政變が起り、遂に米國政府の後援を受けた假共和政府が樹立した。

帝國軍艦浪速が首都ホノルヽへ入港したのは明治二十六年二月十三日で、其三十幾日か前に布哇の王家は滅亡したのであつた。されば浪速の來た頃はまだ王黨と共和黨との對立は消滅せず、物情騷然たるものがあつた。さうして、米國政府の保護の下に建設せられた假共和政府の政廳の屋上には、米國々旗が翻へつて其威容を示し顏であつた。

ある日假政府の大統領ドールが米國軍艦を訪問した。之れが世界列國から正式に承認せられた大統領なら、當然港內に在る各國軍艦は二十一發の禮砲を發すべきであるが、ドールは其資格がないからとて、浪速より先きに來てゐた金剛艦なぞは全然否認してゐた。東鄕艦長も亦金剛の見る所と同じくして、港內の米國軍艦が二十一發の禮砲を放つても、日本軍艦は素知らぬふりをして靜まり返つてゐた。

それより數日後、卽ち三月十六日の事である、一人の日本青年が布哇政府の捕吏に追はれて、海へ飛込み、水を泳いで浪速へと近づいて來た。捕へて見ると、今田與作と呼ぶ者で、犯罪者として獄に投ぜられてゐたが、隙を窺うて脫獄し、捕吏に追はれて浪速へ逃げ込んだものと知れた。此事を艦長へ告げると、乍らく考へてゐたが、其儘に留め置けと命令した。頓て布哇政府の捕吏が端艇にて艦

來り、其引渡方を請求する。けれど艦長は斷乎として引渡を拒んだ。東鄕艦長は一旦かういひ切つたら、誰が如何にいふとて動く者でない。假政府の役人共は、さなくても禮砲問題もあつたあとであるから激昂したけれど、正面から押して來ずに、外國人の得意とする宣傳戰、卽ちホノルヽ發行の歐字新聞で書き立てゝ、若し脫獄人の引渡を如何にしても諾せぬなら、某國艦隊司令長官に依頼して、兵力に訴へても取り戻すといふやうな事までいひ觸らした。併しそんな脅喝は東鄕艦長に取つては蚊子鐵牛を咬むの譬への如くビリツともせぬ。

此手でいけなければ泣きの一手と、今度は副大統領が、浪速を訪問して新聞記事について言ひわけをして、新聞社にキツト戒飭を加へると告げて來た。すると東鄕艦長は、御念の入つた御報告だといつた切り、犯人の引渡しについては空吹く風と聞き流してゐる。

然らば日本總領事に談じ込んで、此手から話込んだが、それもムダであつた。併し遂に或方面へ手を廻したと見え、某所から一封の內訓が艦長の手許に達した。之れには如何なガン張りの艦長も犯人を艦から退けねばならぬ事となり、我領事館員が引取りに來ると、之れに向つて艦長のいふには、軍人の本分として內訓に從ふ外はないが、犯人と雖も日本臣民である、同胞が泣き込んで來たのをヤミヤミ引渡すは心外である、自分は假政府の獄吏の手へ渡すのでない、貴下に對して渡すのであるから其つもりでゐて貰ひたい、其故に此東鄕の眼の屆かぬ場所で、貴下の爲さんとする所を始めて爲し給へといひ渡した。

四月一日、假政府は米國々旗を卸して、布哇國旗にかへ、ともかく布哇は平穩に歸したから、浪速は歸朝を命ぜられ、五月中旬ホノルヽを出でゝ、月末品川に歸つた。

其後復も布哇回航の事があつて、同年十二月二日、浪速は再びホノルヽに入港した。翌年一月十七日は、布哇假政府建設一周年に相當するから、同政府の外務大臣は在港の各國軍艦に、滿艦飾をなし正午禮砲を放つて祝意を表して貰ひたいと申込んだが、東鄕艦長は斷乎として之れを拒絕し、其旨を英米の軍艦にも通達した。當日陸上は假政府の手によつて飾られてゐたが、港內に於ては浪速を始め英米の軍艦も何の飾りもせねば、一發の禮砲も放たなかつた。之れを見たる布哇の心ある人士は東鄕浪速艦長の人物を崇敬して、永く胸裏に其英姿を刻みつけた。

高陞號擊沈

明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起り、淸國は兵を牙山に上陸せしめ、我軍亦仁川に上陸して、日